「釧路湿原自然再生協議会」

第２３回　再生普及小委員会

平成２６年　６月２０日

釧路湿原自然再生協議会運営事務局

釧路湿原自然再生協議会

第23回　再生普及小委員会

日時：平成２６年　６月２０日（金）15:00～17:00
場所：釧路地方合同庁舎５階　第１会議室
（釧路市幸町１０丁目３番地）

―――――――――――――――― 議 事 次 第 ――――――――――――――――

１，開会
２，議事
　１）行動計画ワーキンググループの経過報告
　２）環境教育ワーキンググループの経過報告
　３）再生普及行動計画の見直しについて
　４）その他
３，閉会

―――――――――――――――― 配 布 資 料 ――――――――――――――――

- 議事次第
- 再生普及小委員会　委員名簿
- 第２３回再生普及小委員会 出席者名簿
- 第２３回再生普及小委員会　資料
- 第２２回再生普及小委員会ニュースレター
- 意見・要望アンケート用紙

釧路湿原自然再生協議会
再生普及小委員会　委員名簿

計:60名

■個人(23名)　　(敬称略、五十音順)

No.	氏　名	所　属
1	金　子　正　美	酪農学園大学　環境システム学部　地域環境学科　教授
2	君　塚　孝　一	(有)自然文化創舎　オホーツク知床リサーチワークショップ
3	木　村　　勲	
4	小　松　繁　樹	
5	清　水　信　彦	
6	白　谷　和　明	平和システム研究所　調査研究員
7	新　庄　久　志	釧路国際ウエットランドセンター主任技術員(環境ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ)
8	高　嶋　八　千　代	
9	高　橋　　昭	
10	高　橋　忠　一	
11	橘　　利　器	トラウトフォーラム会員
12	橘　　治　国	
13	鶴　間　秀　典	
14	中　村　太　士	北海道大学大学院　農学研究院　教授
15	蛭　田　眞　一	北海道教育大学釧路校　教授
16	松　本　文　雄	
17	矢　吹　哲　夫	酪農学園大学 環境システム学部 生命環境学科 教授
18	神　戸　　忠　勝	
19	吉　村　　暢　彦	北海道大学環境科学院
20	杉　澤　　拓　男	
21	渡　部　幹　雄	
22	竹　中　　康　進	
23	貞　國　　利　夫	

■団体(22名)　　(敬称略、五十音順)

No.	団体/機関名	代表者名
1	阿寒国際ツルセンター（グルス）	主任解説員　川瀬　幸
2	釧路観光連盟	会長　佐藤　悦夫
3	釧路国際ウエットランドセンター	理事長　蝦名　大也
4	釧路自然保護協会	会長　神田　房行
5	釧路湿原国立公園ボランティアレンジャーの会	代表幹事　山岸　彬
6	釧路湿原国立公園連絡協議会	会長　蝦名　大也
7	釧路シャケの会	会長　小杉　和寛
8	釧路武佐の森の会	会長　大西　英一
9	こどもエコクラブくしろ	近藤　一燈美
10	公益財団法人日本鳥類保護連盟釧路支部	支部長　小柳　慶吾
11	公益財団法人日本野鳥の会 鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ	柴田　英美
12	公益財団法人北海道環境財団	理事長　小林　三樹
13	さっぽろ自然調査館	代表　渡辺　　修
14	特定非営利活動法人 タンチョウ保護研究グループ	理事長　百瀬　邦和
15	塘路ネイチャーセンター	センター長　鷲見　祐将

No.	団体/機関名	代表者名
16	特定非営利活動法人 EnVision環境保全事務所	理事長　赤松　里香
17	特定非営利活動法人 くしろ・わっと	理事長　小林　友幸
18	特定非営利活動法人 鶴居タンチョウ元亀村	理事　佐藤　吉人
19	特定非営利活動法人 トラストサルン釧路	理事長　黒澤　信道
20	北海道標茶高等学校	校長　生田 仁志
21	北海道プロフェッショナルフィッシングガイド協会	会長　テディ齋藤
22	ボランティアネットワークチャレンジ隊	代表　佐竹　直子

■オブザーバー(5団体)　（敬称略）

No.	団体/機関名	代表者名
1	釧路商工会議所	会頭　山本　壽福
2	釧路町商工会	会長　中嶋　嘉昭
3	標茶町商工会	会長　田中　進
4	弟子屈町商工会	会長　桐木　茂雄
5	鶴居村商工会	会長　大津　泰則

■関係行政機関(10機関)　（敬称略）

No.	団体/機関名	代表者名
1	国土交通省 北海道開発局 釧路開発建設部	部長　石田　悦一
2	環境省 釧路自然環境事務所	所長　西山　理行
3	林野庁 北海道森林管理局	局長　古久保 英嗣
4	北海道 釧路総合振興局	局長　土栄　正人
5	北海道教育庁 釧路教育局	局長　宇田　賢治
6	釧路市	市長　蝦名　大也
7	釧路町	町長　佐藤　廣高
8	標茶町	町長　池田　裕二
9	弟子屈町	町長　徳永　哲雄
10	鶴居村	村長　大石　正行

「釧路湿原自然再生協議会」

第２３回　再生普及小委員会

資　料

平成２６年　６月２０日

釧路湿原自然再生協議会運営事務局

目　　次

【再生普及行動計画ワーキンググループの経過報告】

資料１－１　2013 年度再生普及行動計画ＷＧ取組み報告　1
資料１－２　ワンダグリンダ・プロジェクト 2013 活動報告　6
資料１－３　「ワンダグリンダ・プロジェクト 2013」具体的取組(一覧)　7
資料１－４　ワンダグリンダ・プロジェクト 2013 報告書作成概要　9
資料１－５　「ワンダグリンダ・プロジェクト 2014」活動予定　11
資料１－６　「ワンダグリンダ・プロジェクト 2014」具体的取組(一覧)　12
資料１－７　２０１４年度再生普及行動計画ＷＧの活動予定（案）　15

【環境教育ワーキンググループの経過報告】

資料２　　環境教育ワーキンググループの取組み報告、活動予定　17

【再生普及行動計画の見直しについて】

資料３　　第２期再生普及行動計画の実施状況　19

資料 1-1

2013 年度再生普及行動計画 WG 取組み報告

前回委員会（2013 年 12 月 6 日開催）以降、以下の取組みを実施した。

1　行動計画の進行管理、活動支援

■「ワンダグリンダ・プロジェクト 2013」参加者への活動支援

・メールニュースでの活動発信

・ＦＭくしろへ出演案内

・イベント、パネル展等での展示や資料配布による紹介

・活動ＰＲの場の提供

■「ワンダグリンダ・プロジェクト 2013」報告書作成

・2013 年度に参加した 53 団体・個人 80 取組み（協議会含む、資料 2-1 参照）について活動報告書を作成中。今後、冊子に取りまとめて公表、配布予定

■「ワンダグリンダ・プロジェクト 2014」活動募集

チラシ・ポスターの配布など広報を実施し参加者の募集を行った。

■　フィールドワークショップの実施

第１２回「厳寒のヨシ湿原を歩く～シラルトロエトロ川～」

日時：2014 年 2 月 5 日（水）8：30～14：00

案内人：新庄久志　座長

参加者：21 名

内容：シラルトロエトロ川上流部周辺のヨシ湿原散策。

雷別地区森林再生事業地の解説。

＜アンケートより（抜粋）＞

・川と植物、土砂とのつながりを実感出来た。ひとつひとつの解説が実物を前にする事でとても理解しやすかっただけでなく強く印象に残った。

・冬でなければ体験出来ない活動に感動した。

・個人では行けない場所に行くことが出来とっても楽しかった。

・見る事聞く事すべてが勉強になった。現地でお話を聞けた事がとても良かった。体験活動の重要性を改めて感じた。

・湿原環境の様子を新庄さんの解説付きで解り易く知る機会を得る事が出来大変為になった。

・美味しいコーヒータイムは最高の気分だった。

・新庄先生の抱負な知識と経験、人を魅了する語りには痛く関心致しました。

・多くの知識や経験がある方と触れ合えてとても有意義だった。

・ハンノキやヤチダモの植生などから湿原の様子や生い立ちがわかり自然が生きている事が良く解った。

２　情報発信・普及活動の拡充

2-1 情報発信・普及活動

■ＷＥＢサイトの運営

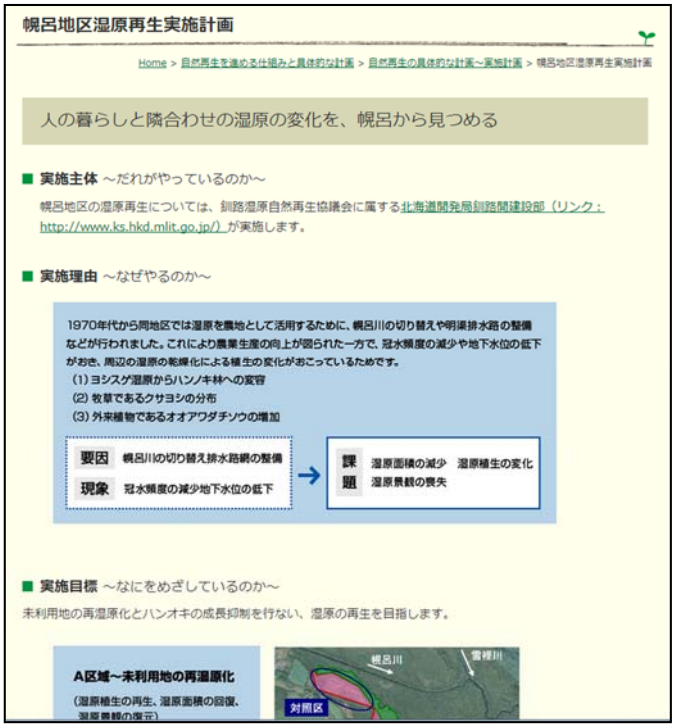
・ホームページ「みんなで進める！釧路湿原の自然再生」の更新を行い、行動計画に参加する団体の活動に関する情報や釧路湿原周辺で行われる行事に関する情報を随時発信した。

概ね月２回程度の更新を行った。（URL　http://heco-spc.or.jp/kushiro/）

・達古武地区で実施されている湿原再生事業及び幌呂地区で実施されている湿原再生事業の概略を紹介する WEB ページを作成し公開した。

［達古武地区］http://heco-spc.or.jp/kushiro/plan/details/taccobuko/

［幌呂地区］http://heco-spc.or.jp/kushiro/plan/details/hororo/



・ブログ「自然再生の今！」を運営した

■メールニュースの配信、掲示

電子メールによるニュースレター「ワンダグリンダ☆ニュース」での情報発信を行った。釧路湿原周辺のイベント情報等を主なコンテンツとして概ね月２回の配信を行った。（配信先：292 件）

また、電子メール受信者自身が施設等に張り出せるよう、メールニュースの内容をＰＤＦファイルとして添付送信した。

■市町村広報誌、新聞等メディアへの情報提供

・毎月釧路湿原国立公園連絡協議会の協力により、関係市町村に情報を配信した。（掲載については各市町村の判断によっており、釧路市には情報があれば毎月掲載していただいた）

・その他イベントごとに報道機関に情報提供を行った。

■イベント出展による情報発信等

・2/1～2/28：「釧路湿原支援再生事業紹介パネル展」（主催：シルバーシティときわ台ヒルズ）

・2/1：「釧路湿原について学ぶ自然文化講座」（主催：シルバーシティときわ台ヒルズ）

講演　「湿原とわたしたちの暮らし」

講師　菊地　義勝　氏（釧路国際ウエットランドセンター事務局長）

参加人数　67 名

・1/19、3/15：「ペーパークラフトで湿原の生き物を作ろう」（主催：釧路町公民館）

講師　辻野　正　氏（ワンダグリンダプロジェクト）

参加人数　14 名

・3/17～3/31：「空からたんけん！釧路湿原：釧路湿原航空写真展示」（主催：釧路町公民館）

３　自然再生の参加の機会づくり

■釧路湿原自然再生講演会「水循環」

実施日時：2014 年 3 月 13 日（木）

実施場所：釧路地方合同庁舎 5 階　共用第 1 会議室

対象：一般

講演タイトル：「釧路湿原の水の動きを探る」

講　師：藤間　聡　氏（水循環小委員長）

主催：水循環小委員会（釧路開発建設部治水課）

資料１-2

ワンダグリンダ・プロジェクト 2013 活動報告

■　「ワンダグリンダ・プロジェクト 2013」参加者への活動支援

以下の活動支援を実施した。

・ワンダグリンダ・プロジェクト 2013 登録証の発行
・ワンダグリンダ・プロジェクトロゴマークの配布
・メールニュースでの活動情報発信
・ＦＭくしろへの出演案内
・各種イベント、パネル展等での展示、資料配布による紹介
・活動ＰＲの場の提供（エコフェア、まなトピア、釧路町公民館講座、ラムサール+20）
・フィールドワークショップの開催（2 回）
・特典カヌーツアーのご招待
・ワンダグリンダ・プロジェクト参加団体交流座談会の実施
・「釧路湿原の自然再生に参加しよう！」イベントへの参加よびかけ
・報告書の作成、配布

■　「ワンダグリンダ・プロジェクト 2013」報告書作成

2013 年度に参加した 53 団体・個人 80 取組み（協議会含む・資料 2-1 参照）について、活動報告をとりまとめ、冊子として釧路湿原自然再生事業普及行動計画 2013 年度の具体的取組みとして活動状況の発信を予定している。

資料 1-3

「ワンダグリンダ・プロジェクト２０１３」具体的取組（一覧）

※「★」今年度新規参加を表す

団体名		取組み概要	No
	太平洋総合コンサルタント株式会社	標茶高校における体験型の環境教育を実施します	1
	川口　秀人	湿原の動植物や風景の写真をカレンダーやポスターにして多くの人が集まる場所などに掲示します	2
	釧路国際ウエットランドセンター	釧路川蛇行復元現場周辺の環境調査を、地域の人々と一緒に行います	3
		湿地・生物多様性に係わる途上国の行政官等を対象とした、湿地保全やワイズユースに関する研修を実施します	4
		ラムサール釧路会議開催２０周年を記念するイベントを開催します	5
		ホームページ、ニュースレター等による釧路湿原の情報発信をします（英語・日本語）	6
	沢田建設株式会社	釧路湿原近郊の清掃活動を実施します	7
	西村　孝弘	釣りの自警活動の一環として釧路川流域で釣り場周辺で清掃活動をします	8
	釧路駐屯地曹友会	細岡展望台整備ボランティアをします	9
		カヌー教室を実施し釧路湿原を魅力を味わいます	10
	タンチョウコミュニティ	タンチョウのえさづくりプロジェクトを実施します	11
	市立釧路図書館　指定管理者　株式会社図書館流通センター	釧路湿原に関する情報提供及び、関連講座や展示を通じた湿原の紹介をします	12
	辻野　正	ペーパークラフトで釧路湿原などの生き物を紹介します	13
	（NPO）タンチョウ保護研究グループ	タンチョウの保護研究に関する教育普及活動を行います	14
	釧路湿原国立公園連絡協議会	釧路湿原に関する情報提供を自然情報誌やガイドブック、ホームページなどで行います	15
		温根内ビジターセンターと塘路エコミュージアムセンターで自然ふれあい行事を実施します。また来訪者などに自然解説や情報提供を行います。	16
		釧路湿原こどもレンジャー活動を実施します	17
		釧路湿原国立公園クリーンデーを実施します	18
	伊勢志郎	来訪者の釧路湿原国立公園来園記念に、折鶴を関連施設に提供します	19
	釧路湿原ＭＴＢクラブ	マウンテンバイクで釧路湿原周辺の林道ツーリングを行います	20
	環境省釧路自然環境事務所	自然再生事業を行っている達古武地区にて、市民体験調査会を行います	21
	（NPO）釧路湿原やちの会	広域農道クリーンウォークをします	22
	（株）日専連釧路	「日専連釧路フィッシャーマンズカード」利用額の一部を釧路湿原国立公園連絡協議会に寄付します	23
	カヌープロ	カヌーを通じ自然の素晴らしさや釧路湿原の大切さをつたえます	24
	ハートンツリー	地球と体にやさしい暮らしを提案します	25
	林野庁北海道森林管理局 釧路湿原森林ふれあい推進センター	「森林アクティビティ講座」の実施	26
		「雷別ドングリ倶楽部」の実施	27
		「お庭で苗木育成」の実施	28
	こどもエコクラブくしろ	釧路湿原における特定外来生物の調査（セイヨウオオマルハナバチ・ウチダザリガニ等）防除を実施します	29
	タクッパ（ペンネーム）	道東の自然や地名をアイヌ語で紹介します	30
★	愛国幸恵町内会	町内会員宅に特定外来種のパンフレットを配布し、拡散の情報を提供します	31
	環境コンサルタント株式会社	達古武湖面をカヌーで清掃します	32
		湿原流域で体験型環境教育を実施します	33
	酪農学園大学　環境地球化学研究室	釧路湿原における温室効果気体の動態調査、水環境と温室効果気体の挙動調査	34
	シルバーシティときわ台ヒルズ	釧路湿原について学ぶ自然文化講座を実施します。	35
	（財）釧路市民文化振興財団（釧路市生涯学習センター）	いきいき女性講座「キラコタン岬から釧路湿原を眺めてみよう」を開催します	36
		まなぽっとシニア講座「釧路湿原」～タンチョウと湿原の草花」を開催します	37
		ふるさと講座　湿原ほたる講座「釧路湿原の夜の隠れた風物詩を探ろう」を開催します	38
		釧路学教養講座「霧多布湿原を訪ねて」を開催します	39
		まなぽっと子ども探検隊「仮）森と遊ぼう 2013」を開催します	40

★	品田　忠	木の枝の作品造りや展示を通し湿原からの水の大切さ伝えます	41
★	(株)釧路マーシュ＆リバー	釧路川カヌーツーリングや釧路湿原探索ガイドをすることで釧路湿原の魅力を全国、全世界の皆さんへ発信していきます	42
	イオン釧路店　チアーズクラブ	フィールドや学習会を通し釧路湿原を学びます	43
	釧路シャケの会	シャケの稚魚の里親募集と放流式を実施します	44
	釧路湿原国立公園ボランティアレンジャーの会	クリーンウォークを実施します	45
		特定外来生物「ウチダザリガニ駆除調査」を実施します	46
		温根内木道定点解説を実施します	47
	釧路湿原全国車いすマラソン大会実行委員会	第 26 回釧路湿原全国車いすマラソン大会を実施します	48
	釧路短期大学	湿原をとりまく地域食材を使用した、学生考案の「咲くさクッキー」を釧路全日空ホテルと連携して販売し、湿原自然再生に還元します（諸活動と収益の一部寄附）	49
	釧路湿原マラソン実行委員会	釧路湿原マラソンを通じて湿原のすばらしさを参加者の方に伝えます	50
	お菓子司　二幸	「湿原まんじゅう」を販売します	51
	くしろ自然再生解説員	釧路湿原の特徴や自然再生事業などについてボランティアで解説を実施します	52
	釧路湿原川レンジャー	釧路湿原の良質な河川環境づくりに貢献します	53
	(株)ＦＭくしろ	放送を通じて湿原にまつわる四季折々の話題を発信します	54
	奈良　笹本由文	鶴居村私有林の自然林育成及び調査記録	55
	(NPO)北海道フィシャーズ協会	釧路湿原の清掃活動をします	56
	リンク・リング	野生生物へのエサやりの是非の説明をして、人と動物・自然のかかわりについて考える機会を持ってもらう	57
	北海道阿寒高等学校	「地域巡検」を実施し、湿原や釧路の自然の大切さを体験します	58
	（NPO）トラストサルン釧路	ナショナルトラスト地の環境保全作業にボランティアの方と共に取組み、湿原やトラスト地の観察会を行います。	59
	（公財）日本野鳥の会　鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ	施設来訪者へのタンチョウの解説をします	60
		学生ボランティアネットワーク組織「F.A.ネットワーク」主催のワークキャンプの受け入れをします	61
		タンチョウティーチャーズガイド（TTG)講習会を開催します	62
		ボランティア・ツアー「グリーンホリデーin 釧路～タンチョウの食事場所を整えよう～」を開催します	63
		タンチョウの冬期自然採食地を守ろう	64
	ボーイスカウト釧路第６団　カブ隊	自然観察や自然体験の実施	65
	喜多島　麻鈴	コンサートを通じて、釧路湿原を PR していきます	66
	さとぽん	ホームページによる釧路湿原の魅力や歩き方に関する情報を発信します	67
	釧路ボタニカルアートの会	釧路湿原の植物を描きます	68
	アトリエ「アリス」	釧路湿原などの自然を含む釧路地域の素晴らしさを描くことによってアピールする	69
		釧路に自生する植物を使ったアート作品の製作と発表	70
		釧路川周辺の清掃活動を実施します	71
	（ＮＰＯ）環境把握推進ネットワーク～ＰＥＧ	釧路湿原に生息する希少動植物や外来動植物に関する、学習会や講演会の実施	72
★	小荷田　行男	釧路湿原とその周辺域の植物生態・自然史・鳥類生態の調査研究	73
★	木幡　弥乃莉	「ワンダグリンダ☆ニュース」作成のお手伝いをします（イラストの提供）	74
５２ 団体・個人／７４取組み			
	釧路湿原自然再生協議会	釧路湿原自然再生協議会や各委員会の情報を発信します（会議公開、HP、ニュースレター発行）	1
		学習会や講演会などを行います	2
		市民参加の見学会を実施します	3
		パネル展などを実施します	4
		視察・研修などを受入れます	5
		自然再生に関わる資料を発刊します	6
５３団体・個人／８０取組み（協議会含む）			

資料 1-4

ワンダグリンダ・プロジェクト 2013 報告書作成概要

■報告書作成のねらい

○釧路湿原自然再生普及行動計画（以下、「再生普及行動計画」と略）の 2013 年度具体的取組みの状況を記録する。
○再生普及行動計画の活動状況を、圏域内外に広く発信し、釧路湿原の保全・再生に向けた多様な活動や参加の機会を多くの人に知ってもらう。
○新たな取り組みを呼びかけ、誘発していくための材料とする。

■作成方針

○再生普及行動計画や具体的取組みが何であるのか解かり易く説明する。
○具体的取組みの実施者作成の報告書を基本とし、個々の取組みを統一した書式で編集する。
○関係者のみならず、様々な立場の人に手にとって頂けるよう、デザイン・装丁等に配慮する。
○印刷物としての配布だけではなく、再生普及行動計画ＷＧ通信などのウェブサイトでも公開する。

■使用

○装丁：Ａ４版、カラー表紙、本文モノクロ印刷、約 100 ページ
○印刷部数：1200 部
○発行者：釧路湿原自然再生協議会再生普及小委員会
○発行日：2014 年 6 月

■配布に関して

○釧路湿原自然再生協議会構成員・事務局機関
○公共施設、期間／釧路管内教育機関（小・中・高・大・専・養護）
○ＷＧ事務局より随時配布（郵送希望者は、切手つき返信用封筒を事務局宛に郵送→配布）
○くしろエコ・フェア 2014 等各イベント
○ＷＧ構成メンバーの活動の中で配布（機会や部数等を事務局にご連絡下さい）
この他、「再生普及行動計画ワーキンググループ通信」ＷＥＢサイトで公開する。

■構成・目次

はじめに
○発行者代表（再生普及小委員会委員長）名で挨拶文を記載

１　ワンダグリンダ・プロジェクトとは

〇釧路湿原自然再生事業の趣旨、協議会、進行管理の仕組み等の概略を記述

〇再生普及行動計画作成の趣旨、経緯、進行管理の仕組み等の概略を記述

〇再生普及行動計画の３つの柱をパンフレット記載レベルで記述

２　2013 年度具体的取組み（ワンダグリンダ・プロジェクト 2013）の経緯

〇募集からとりまとめの経緯を記述

３　2013 年度具体的取組み（ワンダグリンダ・プロジェクト 2013）取組み一覧

４　2013 年度具体的取組み（ワンダグリンダ・プロジェクト 2013）報告

5　「自然再生に参加しよう！」取組み報告

参考

〇釧路湿原自然再生事業の趣旨、協議会、進行管理の仕組み等の概略を記述

〇協議会の構成と再生普及小委員会名簿、再生普及行動計画ＷＧ名簿を記載

〇ワンダグリンダ・プロジェクト推進サポーターの掲載

〇ワンダグリンダ・プロジェクトの活動の様子を掲載

資料 1-5

「ワンダグリンダ・プロジェクト 2014」活動予定

■「ワンダグリンダ・プロジェクト 2014」募集

2 月 10 日～3 月 10 日を集中期間として募集チラシを作成し各施設に配布、また新聞等で広報し「ワンダグリンダ・プロジェクト 2014」の参加者を募った。

○総数

57 団体（個人）　79 取組（協議会含む）

○新規

・橘　治国様：釧路湿原の水環境保全

・釧路走ろう会様：釧路湿原内で開催される大会や練習会に参加して楽しく走る事で釧路湿原の魅力をたくさんの人達に伝える

・竹中康進様：「羽幌みんなでつくる自然空間協議会」によるビオトープづくりの取り組み紹介

・ミュージックサロン・タジマ様：カラオケの発表会を通して湿原のＰＲや募金活動を行う

・イオン釧路昭和店チアーズクラブ様：地域と自然環境について学ぶ

■「ワンダグリンダ・プロジェクト 2014」参加者への活動支援

・ワンダグリンダ・プロジェクト 2014 登録証の発行

・ワンダグリンダ・プロジェクトロゴマークの配布

・ワンダグリンダ・プロジェクト普及シールの配布

・ワンダグリンダ・プロジェクト参加団体間交流の場の提供

・メールニュースで活動発信

・ＦＭくしろ出演案内

・ホームページでの取組み紹介

・パネル展等での展示、資料配布での紹介

・活動ＰＲの場の提供

・自然再生と市民をつなげる場の提供（自然再生参加イベント）

・学習、交流の場としてフィールドワークショップの開催（2 回）

・特典カヌーツアーのご招待

・報告書の作成、配布

資料 1-6

「ワンダグリンダ・プロジェクト２０１４」具体的取組（一覧）

NO	氏名・団体名	取組み概要	取組み時期・回数
1	愛国幸恵町内会	釧路湿原や町内会周辺の身近な自然の写真を町内会にて回覧します	通年
2	アトリエ「アリス」	釧路湿原などの自然を含む釧路地域の素晴らしさを描くことによってアピールする	
3	アトリエ「アリス」	釧路に自生する植物を使ったアート作品の制作と発表	
4	アトリエ「アリス」	釧路川周辺の清掃活動を実施します	
5	イオン釧路店チアーズクラブ	環境学習	毎月 1 回を基本に年間 10 回程度
6	イオン釧路昭和店チアーズクラブ	地域と自然環境について学んでいます	毎月 1～2 回程度
7	伊勢　志郎	釧路湿原国立公園内の施設に来園記念の折鶴を提供しています。また、たんちょう釧路空港や丹頂鶴関連の施設にも提供しています。	通年
8	一般財団法人釧路市民文化振興財団 （釧路市生涯学習センター）	～いきいき女性講座～ 温根内のミズゴケ湿原の散策と鶴居村ふるさと情報館の見学 （湿原に触れ、湿原について学ぶ）	5 月～10 月全 13 回の中で実施
9	一般財団法人釧路市民文化振興財団 （釧路市生涯学習センター）	～まなぼっとシニア講座～ 釧路湿原（温根内木道）散策と湿原美術館の鑑賞 （湿原に触れ、湿原について学ぶ）	5 月～12 月全 16 回の中で実施
10	一般財団法人釧路市民文化振興財団 （釧路市生涯学習センター）	～ふるさと講座～ 湿原ホタル講座　釧路湿原の夜の隠れた風物詩を探ろう （温根内木道にてホタル観察）	5 月～12 月全 17 回の中で実施
11	一般財団法人釧路市民文化振興財団 （釧路市生涯学習センター）	～まなぼっとわくわく体験隊～ 森とあそぼう 2014（達古武で自然再生を考える調査体験）	5 月～1 月全 13 回の中で実施
12	一般財団法人釧路市民文化振興財団 （釧路市生涯学習センター）	～釧路学教養講座～ 釧路湿原を訪ねて　キラコタン岬と自然再生地 （湿原に触れ、湿原について学ぶ）	5 月～12 月全 15 回の中で実施
13	（株）FMくしろ	放送を通じて、湿原にまつわる四季折々の情報を発信します	毎週金曜日 11:10～放送
14	お菓子司　二幸	「湿原まんじゅう」を販売します	通年
15	カヌープロ	カヌーを通じ自然の素晴らしさや釧路湿原の大切さを伝えます	5 月 1 日～10 月 31 日
16	川口　秀人	湿原の様子を写真に収め、カレンダーにして掲示します	毎月
17	環境コンサルタント株式会社	達古武湖をカヌー清掃します	8～9 月に 1 回
18	環境省釧路自然環境事務所	自然再生事業を行っている達古武湖にて、市民体験調査会を行います	年 2 回会
19	（NPO）環境把握推進ネットワーク～PEG	釧路湿原に生息する希少動物や外来動植物に関する、学習会や講演会の実施	2～3 回
20	喜多島　麻鈴	コンサートを通じて湿原をPRします	
21	釧路国際ウェットランドセンター	ホームページ、ニュースレター等による釧路湿原の情報発信（日本語・英語）	ホームページ：随時更新　ニュースレター：3 月に 1 回発行。その他湿地関連イベント等で配布
22	釧路国際ウェットランドセンター	湿地・生物多様性に係わる途上国の行政官等を対象とした湿地保全やワイズユースに関する研修を実施（JICAより委託）	湿地保全に関する研修：5 月～7 月,エコツーリズムに関する研修：8 月～9 月
23	釧路国際ウェットランドセンター	釧路川蛇行復元現場周辺の環境調査を地域の人々と一緒に行います	初夏と秋に各 1 回

24	釧路自然解説員	「自然再生解説員」により釧路湿原や自然再生事業の取り組みを細岡展望台を訪れる観光客を対象にわかりやすく解説します	5 月、7 月、9 月に実施予定
25	釧路湿原 MTB クラブ	釧路湿原周辺の林道ツーリングを行う	月 2 回
26	釧路湿原川レンジャー	釧路湿原や釧路川の観察活動および環境学習を通じて良好な河川環境の維持に務めます	6 月、8 月、9 月、1 月の計 4 回実施予定
27	釧路湿原国立公園ボランティアレンジャーの会	クリーンウォークの実施	4 月～11 月　5 回
28	釧路湿原国立公園ボランティアレンジャーの会	ウチダザリガニ駆除調査	6 月～10 月　5 回
29	釧路湿原国立公園ボランティアレンジャーの会	温根内木道定点解説	7 月～9 月　3 回
30	釧路湿原国立公園連絡協議会	釧路湿原に関する情報を自然情報誌、ガイドマップ、ホームページなどで提供します	未定
31	釧路湿原国立公園連絡協議会	温根内ビジターセンターと塘路湖エコミュージアムセンターで自然ふれあい行事を実施します。また来訪者に自然解説や情報提供を行います	未定
32	釧路湿原国立公園連絡協議会	釧路湿原こどもレンジャー活動を実施します	未定
33	釧路湿原国立公園連絡協議会	釧路湿原国立公園クリーンデーを実施します	未定
34	釧路湿原自然再生協議会	釧路湿原自然再生協議会や各委員会の情報を発信します（会議公開、HP、ニュースレター発行）	
35	釧路湿原自然再生協議会	学習会や講演会などを行います	
36	釧路湿原自然再生協議会	市民参加の見学会を実施します	
37	釧路湿原自然再生協議会	パネル展などを実施します	
38	釧路湿原自然再生協議会	視察・研修などを受入れます	
39	釧路湿原自然再生協議会	自然再生に関わる資料を発刊します	
40	釧路湿原全国車いすマラソン大会実行委員会	釧路湿原全国車いすマラソン大会を開催します	年 1 回
41	釧路湿原マラソン実行委員会	釧路湿原マラソンを通じて湿原の美しさを道内外から参加される方々に伝える事	7 月 27 日（日）開催
42	釧路シャケの会	シャケの稚魚の里親募集と放流式を実施します	
43	釧路短期大学	湿原をとりまく地域食材を使用した学生考案の「咲くサクッキー」を釧路全日空ホテルと連携して販売し湿原自然再生い還元します	通年
44	釧路駐屯地曹友会	①細岡展望台整備ボランティアの実施、カヌー教室の実施	年 1 回　7 月上旬
45	釧路走ろう会	釧路湿原内などで開催される大会や練習会に参加し楽しく走っています	通年
46	釧路ボタニカルアートの会	釧路湿原の植物を描きます	
47	（株）釧路マーシュ＆リバー	釧路川でのカヌーツーリングや湿原散策をガイドしながら釧路湿原の魅力を全国、全世界の皆さんへ発信して行きます	通年
48	（NPO）釧路湿原やちの会	湿原道路の清掃を予定	5 月 17 日（土）
49	こどもエコクラブくしろ	釧路湿原における特定外来生物の調査・防除活動	6 月～10 月／5 回
50	小荷田　行男	釧路湿原とその周辺域の植物生態・自然史・鳥類生態の調査研究	年 2 回
51	木幡　弥乃莉	ワンダグリンダ☆ニュースのイラスト提供等	月 2 回程度
52	さとぽん	ホームページによる釧路湿原の魅力や歩き方に関する情報発信	月に 1 回程度
53	さとぽん	旅を通して自然の美しさや大切さを自然に感じられるような釧路湿原の情報発信	こまめにつツイッター更新
54	沢田建設株式会社	釧路湿原近郊の清掃活動（ごみ拾い）をします	6 月～7 月に 1 回、10 月～11 月に 1 回

55	品田　忠	木の枝の作品作りや展示、木工教室を通し湿原からの水の大切さを伝えます	
56	市立釧路図書館　指定管理者　株式会社図書館流通センター	釧路湿原に関する情報提供及び、関連講座や展示を通じた湿原の紹介をします	不定期年 1 回程度
57	シルバーシティときわ台ヒルズ	釧路湿原を学ぶ自然文化講座を実施します	年 1 回
58	太平洋総合コンサルタント株式会社	標茶高校における体験型の環境教育の実施（野外での水質調査、生物調査を通して身近な環境を楽しみながら学ぶ）	9 月～11 月の中で 2～4 回程度
59	タクッパ（ペンネーム）	道東の自然や地名をアイヌ語で紹介します	通年
60	竹中　康進	「羽幌みんなでつくる自然空間協議会」によるビオトープづくりの取り組みを紹介します	随時
61	橘　治国	釧路湿原の水環境保全	夏期～秋期に 1～2 回
62	タンチョウコミュニティ	タンチョウのえさづくりプロジェクト	5 月下旬：種まき　9 月下旬：コーン収穫　1 月：コーンほぐし　他
63	（NPO）タンチョウ保護研究グループ	タンチョウの保護に関する教育普及活動を行います	
64	辻野　正	ペーパークラフトで釧路湿原などの生き物を紹介します	随時　年間 10 回以上
65	（NPO）トラストサルン釧路	ナショナルトラスト地の環境保全作業にボランティアの方と共に取組み、湿原やトラスト地の観察会を行います	
66	(株)日専連釧路	「日専連釧路フィッシャーマンズカード」利用額の一部を釧路湿原国立公園連絡協議会に寄付します	通年
67	西村　孝広	釣りの自警活動の一環として釣り場周辺の清掃活動を行います	通年
68	西村　孝広	オオハンゴンソウの駆除活動を行います	6、7 月頃
69	（公財）日本野鳥の会　鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ	タンチョウ・ネイチャーズガイド（TTG）講習会の開催	
70	（公財）日本野鳥の会　鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ	タンチョウの冬季自然採食地を守ろう	
71	ハートンツリー	ハーブを使った石鹸、化粧水、クリーム作り講習会、ガーデニング講習会を実施します	通年
72	ボーイスカウト釧路第6団カブ隊	自然観察や自然体験を実施します	通年
73	北海道阿寒高等学校	「地域巡検」を実施し、湿原や釧路の自然の大切さを体験させています	9 月中旬から 10 月上旬に 1 回
74	（NPO）北海道フィッシャーズ協会	釣りをとおして釧路川・湿原を知っていただく活動	4 月中旬から 5 月初旬、9 月中旬から 12 月初旬
75	ミュージックサロン・タジマ	カラオケ発表会を通して湿原のPRや募金活動を行う	通年
76	酪農学園大学　環境地球科学研究室	釧路湿原における物質循環についての研究	5 月～11 月まで月 1 回の観測
77	林野庁　北海道森林管理局釧路湿原森林ふれあい推進センター	シラルトロ湖上流の立枯れ被害にあった森林で市民参加型の自然再生事業を行います	年 5 回
78	林野庁　北海道森林管理局釧路湿原森林ふれあい推進センター	自然再生事業地の広葉樹の種子から育成した苗木を 3 年程度預かって育てて頂いています	通年
79	リンク・リング	野生生物へのエサやりの是非を配布するカードを通して考えてもらい、人と動物・自然のかかわりについて考える機会を持ってもらう	通年
57 団体・個人/79 取組み（協議会含む）			

資料1−7

2014年度再生普及行動計画WGの活動予定（案）

１　WGの開催と鼓動計画の進行管理、活動支援

行動計画の進行管理、参加者の活動支援、活性化に向けた取組みを行う。

○行動計画WGの開催：２回程度開催（次回は１月頃の予定）
○ワンダグリンダ・プロジェクト2013活動報告書作成
○ワンダグリンダ・プロジェクト2014の進捗把握、活動支援
○ワンダグリンダ・プロジェクト2014参加登録書及びサポーター登録証の発行
○ワンダグリンダ・プロジェクト関係者に普及シールの配布
○ワンダグリンダ参加団体間の交流の促進
○フィールドワークショップの開催（2回実施予定）
　＜第１回目＞　開催日：7月23日（水）　開催内容：赤沼周辺散策
○ワンダグリンダ特権カヌーツアーの実施

２　情報発信・普及活動の拡充

2-1　情報発信・普及活動

第2期行動計画の重点分野「釧路湿原を知る・楽しむ・学ぶ」を広げて行くため、多様な活動を発信していく。

○メールニュースの配信、掲示
○市町村広報誌への情報提供、記事掲載
○ＦＭくしろ「ゆうゆう湿原塾」への出演
○イベントへの出展、パネル展の開催等
○メディアへの発信、参加の働きかけ
○「自然再生ブログ」で自然再生事業の動きを伝える

３　自然再生の参加の機会づくり

第2期行動計画の重点分野「自然再生に参加する・行動する」の機会を創設する。

○「釧路湿原の自然再生に参加しよう！」イベントの実施
○他小委との連携による、実施計画ごとの市民参加の機会づくり
○市民活動（ワンダグリンダ）による自然再生への取り組みを促進させる
○自然再生事業の地元向け見学会
　※各担当小委員会が実施し、普及小委員会はサポートとして協力する

資料２

環境教育ワーキンググループの取組み報告、活動予定

１　教科学習での釧路湿原の活用促進を目的とした学習資料の作成、活用促進

平成 24 年度に作成した『釧路湿原を題材とした学習資料』（WEB サイト kushiro-ee.jp に掲載）に新たな学習資料のとりまとめを行った（平成 23 年度 3 月公開）。取りまとめた学習資料のテーマ、概要は次のとおり。

・流れる水のはたらき～釧路川：釧路川水系の６河川について上流から下流までの様子を掲載
・塘路湖で行われている漁業：漁業の概要、環境保全との接点等をテーマとするトピックを掲載
・湿原と酪農～人の暮らしと自然との接点：酪農の概要、環境（湿原）との接点をテーマとするトピックを掲載

今後、流域圏の学校への案内、教員研修講座参加者への PR、北海道教育大学と連携した授業活用例の開発（環境教育 WG として開発支援）、授業案の情報提供等を通して、活用促進を行っていく。

２　教員研修講座の実施

釧路教育研究センターと共催して、理科や社会科の視点からフィールドワークを主体とした教員研修講座を実施する。また、9 月から 10 月に、教育委員会の協力を得た公募講座を実施する予定としている。

〇体感！釧路湿原～理科と社会の視点から

実施日時　：　2014 年 6 月 26 日（木）9 時 30 分～16 時 00 分
実施場所　：　鶴居村下久著呂
参加者数　：　釧路管内の小学校・中学校教員 20 名程度を予定
主な内容（予定）：
・講話：講話タンチョウの生息に適した環境・保護における課題
・体験：自然河川での生き物（タンチョウの餌資源）調査
・活動：デントコーン畑の食害実態の把握、農家さんからの話
講　　師　：　音成 邦仁 氏（タンチョウコミュニティ代表）
共　　催　：　釧路教育研究センター

３　流域圏の小学校、中学校を対象としたアンケート調査の実施

釧路湿原を題材とした学習の実施状況、環境教育 WG において作成した資料等の活用状況等を把握し、課題把握を行うとともに、今後の普及方針の検討資料として活用する。

資料

第2期再生普及行動計画の実施状況

2014年6月20日（金） 再生普及小委員会

1

第二期再生普及行動計画の経緯

2005年3月　釧路湿原自然再生全体構想（2005年3月）策定

2005年6月　釧路湿原の自然再生にかかる環境教育や市民参加を一層推進するための5カ年の計画として、「釧路湿原自然再生普及行動計画」を策定

2009年度　同計画の実施状況を評価し、改訂を検討

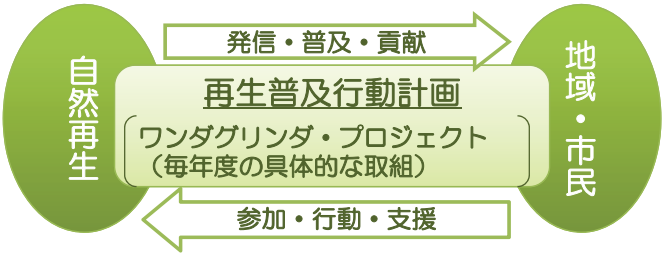
2010年1月　第15回協議会で第2期行動計画（2010～2014年度）を承認

2012年度　第2期行動計画の中間評価を実施

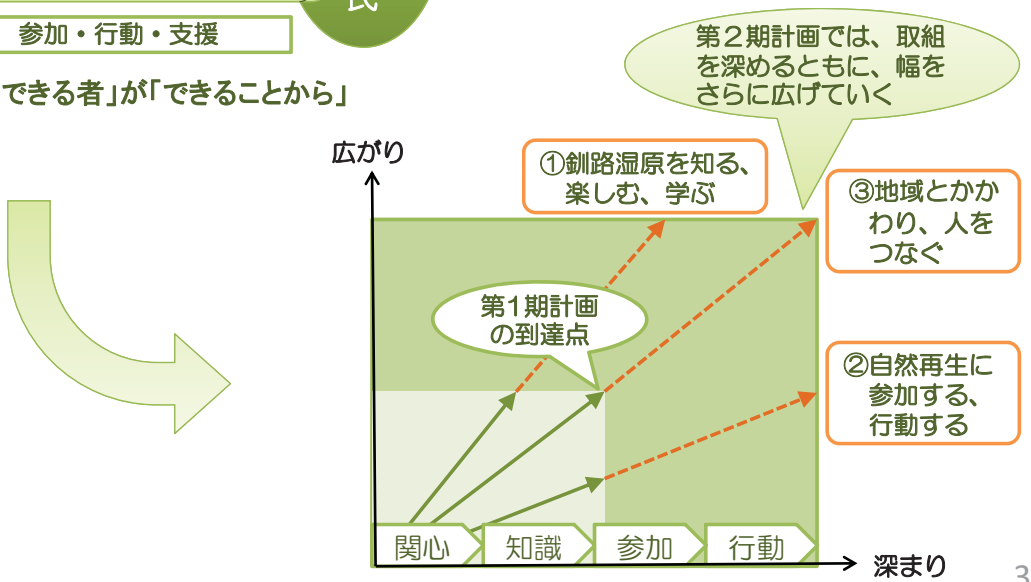
2014年度　全体構想見直し
第2期行動計画の実施状況評価、改訂（予定）

2

第二期再生普及行動計画の考え方



モットー：「できる者」が「できることから」



第二期再生普及行動計画の3つの柱

①　釧路湿原を知る、楽しむ、学ぶ

協議会は、これまでにたくさんの人が関わって進めてきた、湿原を「知る」、「楽しむ」、「学ぶ」活動を行動計画の基盤として継続し、人々が湿原に接する「入口」と「幅」を広げていきます。

②　自然再生に参加する、行動する

協議会は、湿原について気づきや知識を得た人たちが、今度は一歩進めて、様々な活動に参加し、協力し、支援し、行動することで、湿原との関わりを深めていけるよう、行動計画のこれまでの経験や成果を活用して、当面重点的に活動します。

③　地域と関わり、人をつなぐ

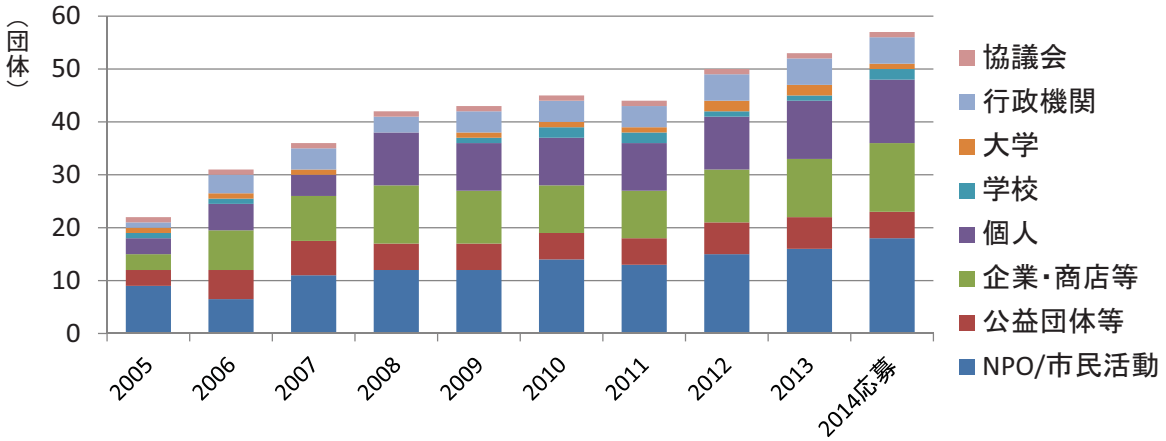
協議会は、自然再生と地域の人とのつながりをつくり、関心、学び、参加、行動、協力、支援のそれぞれを博が、将来にわたって湿原の自然と一緒に暮らしていける、地域の持続的な発展を目指します。

※　以下のデータは、今回の分析のためにあらためて分類し直したうえで集計等を行っているため、これまでの公表資料とは数字が異なります。過去のデータと比較、照合される際にはご注意ください。

5

1．ワンダグリンダ・プロジェクト登録者数

●産官（公）民が比較的バランスよく参加し、増加傾向にある。
●教育機関の参加は少なく、一次産業の参加は得られていない。



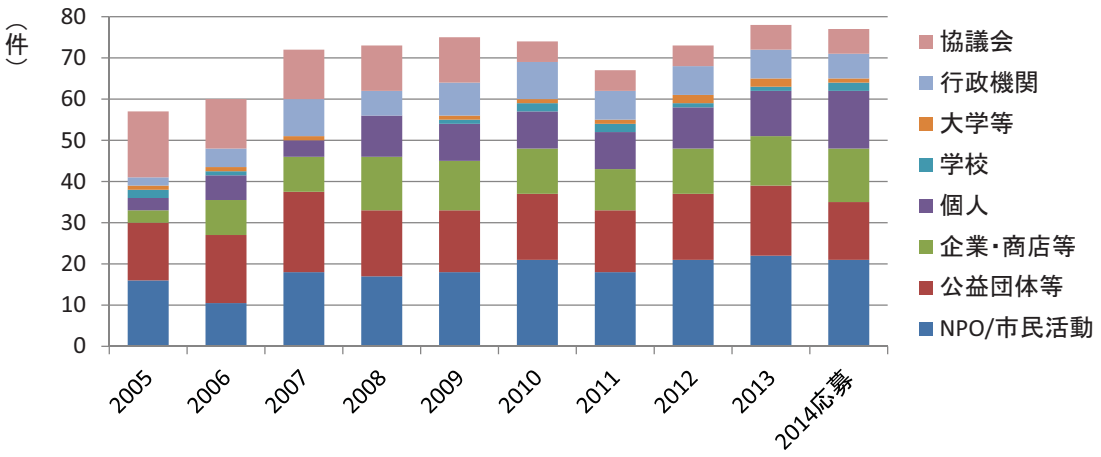
	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014応募
NPO/市民活動	9	6.5	11	12	12	14	13	15	16	18
公益団体等	3	5.5	6.5	5	5	5	5	6	6	5
企業・商店等	3	7.5	8.5	11	10	9	9	10	11	13
個人	3	5	4	10	9	9	9	10	11	12
学校	1	1	0	0	1	2	2	1	1	2
大学	1	1	1	0	1	1	1	2	2	1
行政機関	1	3.5	4	3	4	4	4	5	5	5
協議会	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
計	22	31	36	42	43	45	44	50	53	57

※　端数は、異なる主体による共催事業の按分による。

6

＜参考＞ワンダグリンダ・プロジェクト登録件数

（※　事業件数の数え方は同一団体でも年度ごとに異なるため、あくまで参考程度。）



	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014応募
NPO/市民活動	16	10.5	18	17	18	21	18	21	22	21
公益団体等	14	16.5	19.5	16	15	16	15	16	17	14
企業・商店等	3	8.5	8.5	13	12	11	10	11	12	13
個人	3	6	4	10	9	9	9	10	11	14
学校	2	1	0	0	1	2	2	1	1	2
大学等	1	1	1	0	1	1	1	2	2	1
行政機関	2	4.5	9	6	8	9	7	7	7	6
協議会	16	12	12	11	11	5	5	5	6	6
計	57	60	72	73	75	74	67	73	78	77

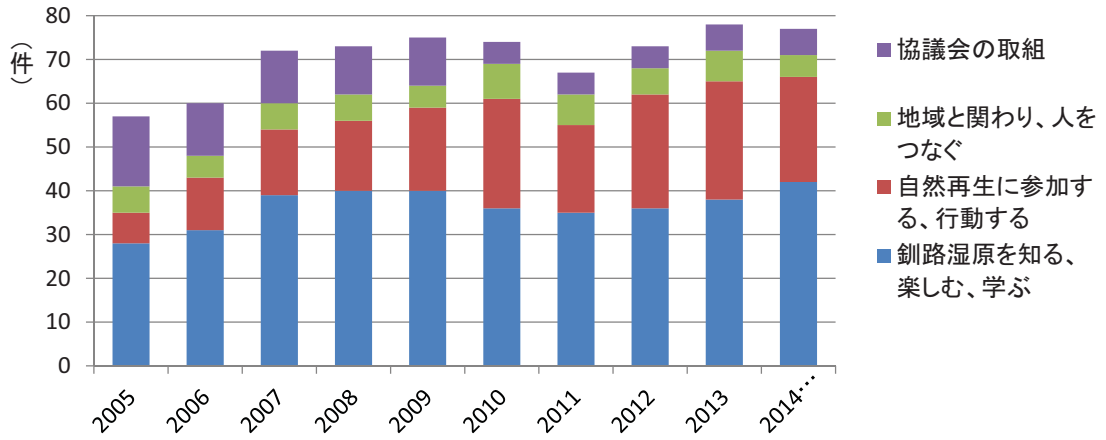
※　端数は、異なる主体による共催事業の按分による。

7

2. ワンダグリンダ・プロジェクトの活動分野

※　応募活動を事務局が第2期行動計画の3分野に分類したもの。

● 「自然再生に参加する・行動する」の取組件数は増加傾向にある。



	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014応募
釧路湿原を知る、楽しむ、学ぶ	28	31	39	40	40	36	35	36	38	42
自然再生に参加する、行動する	7	12	15	16	19	25	20	26	27	24
地域と関わり、人をつなぐ	6	5	6	6	5	8	7	6	7	5
協議会の取組	16	12	12	11	11	5	5	5	6	6
計	57	60	72	73	75	74	67	73	78	77

8

3. 実施状況（1）釧路湿原を知る、楽しむ、学ぶ

- 公園利用施設や公益団体による定期的な行事、学校での本格的な環境教育、修学旅行の受入から、音楽・アート、関連商品販売まで、バラエティーに富む活動が展開されている。
- 官民それぞれが湿原をフィールドとする活動に継続的に取り組んでおり、市民や来訪者が湿原に接する機会は相当数存在している。
- 長期間継続して活動している団体が多く、新規活動が活発に創出されているわけではない。

訪問学習で湿原を学ぶ小学生（北斗）

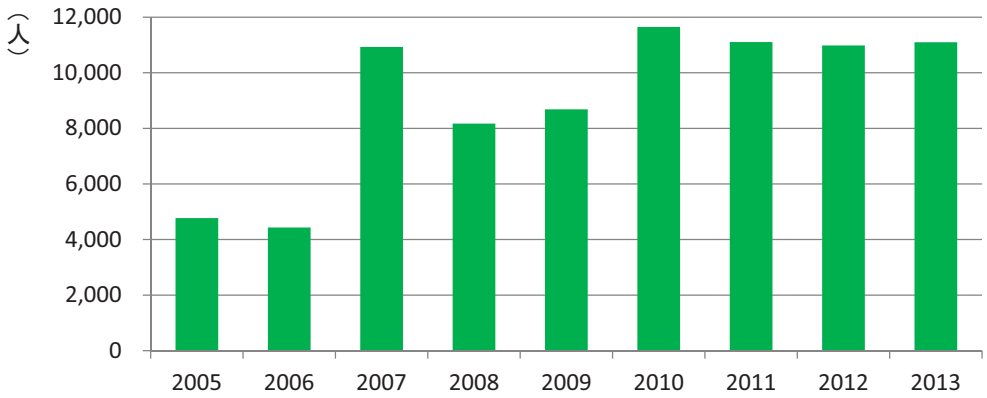
湿原まんじゅう（二幸）

野外コンサートで自然再生を紹介（細岡）

9

＜参考＞ワンダグリンダ・プロジェクト登録行事への参加人数

- 報告書に記載のある数値の単純合計であり、あくまで参考程度のデータだが、ワンダグリンダ・プロジェクトだけでも毎年延べ1万人以上が湿原と何らかの接点を持っていることがわかる。

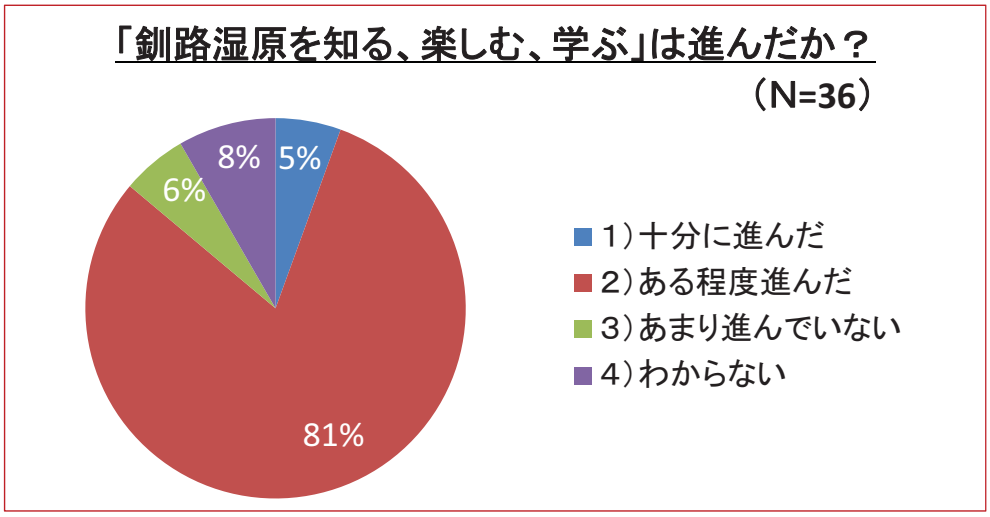


	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
参加人数（人）	4,773	4,433	10,930	8,170	8,685	11,650	11,104	10,982	11,098
対象行事（件）	110	112	107	93	99	104	98	99	84

10

＜参考＞　協議会アンケートの結果から

- ワンダグリンダ・プロジェクトをはじめとする多種多様な活動で、「入口」と「幅」の広がりが実感されている。
- 対象世代の拡大、次世代等担い手の拡大、学校教育における取組強化等の必要性が指摘されている。参加機会は増えたが周知や理解は不足していること、将来的な目標像が不明確であることについても言及がある。
- 普及小委が協議会（各小委等）全体の広報を担うべき、との意見があった。



11

3. 実施状況（2）自然再生に参加する、行動する

- 市民が直接参加できる自然再生活動は、第１期行動計画に比べて増加した。
- トラスト地の保全、タンチョウの自然採餌環境整備、ウチダザリガニやオオハンゴンソウ等の外来種駆除、育苗や植樹活動等が定着している。
- 道路等の周辺環境を含めた清掃活動は、市民活動の他、企業の社会貢献活動としても行われている。
- 近年は、協議会としても自然再生事業への参加機会作りに重点的に取り組んできた。

カヌーによる清掃（達古武湖）

住民参加のハンノキ調査（下幌呂）

パークボランティアによるウチダザリガニ捕獲（温根内）

12

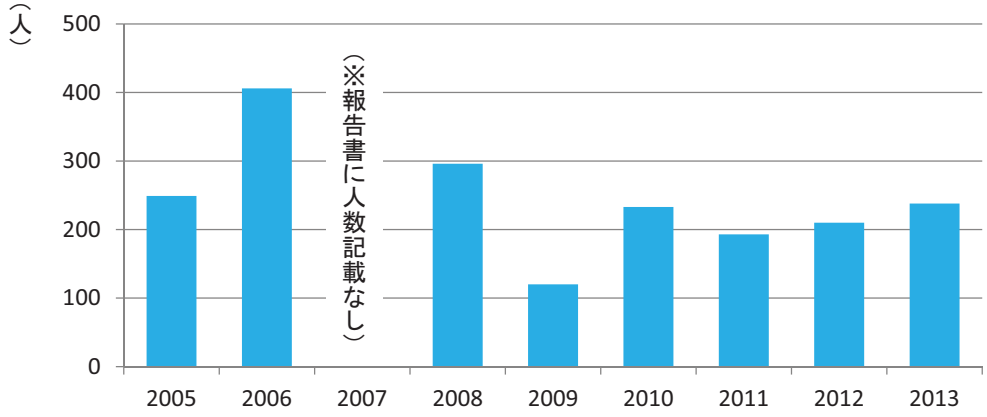
＜参考＞ 2013年度「釧路湿原の自然再生に参加しよう」活動一覧

開催日	参加者	行事名	主催者
7月20日	22名	タンチョウの冬の食事場所をつくろう！	鶴居・伊藤サンクチュアリ
7月20日	10名	来年の植樹に備えた苗づくり	トラストサルン釧路
7月21日	6名	森林アクティビティ講座　苗の植栽にチャレンジ	森林再生小委員会 （釧路湿原森林ふれあい推進センター）
7月28日	19名	外来生物ウチダザリガニの捕獲体験	釧路湿原ボランティアレンジャーの会 ＆こどもエコクラブくしろ
8月3日	62名	釧路湿原国立公園クリーンデー	釧路湿原国立公園連絡協議会
8月4日 8月5日	26名	達古武の森　朝のお散歩～森林再生の森を歩いてみよう～ ※自然再生現場見学会「森林再生」（達古武）	森林再生小委員会（環境省釧路自然環境事務所）
8月7日	23名	釧路湿原が危ない！旧農地を湿原に戻す取組み ※自然再生現場見学会「湿原再生」（下幌呂）	湿原再生小委員会（釧路開発建設部治水課）
8月18日	19名	ザリガニウォッチング	釧路湿原国立公園連絡協議会 温根内ビジターセンター
8月20日	17名	釧路湿原が危ない！土砂流入を防ぐ取組み ※自然再生現場見学会「土砂流入」（久著呂川）	土砂流入小委員会（釧路建設管理部）
8月31日	4名	釧路湿原を探検！オオハンゴンソウ駆除大作戦！	環境把握推進ネットワークPEG
9月7日	27名	みんなで調べる復元河川の環境・2013秋	釧路国際ウェットランドセンター
9月14日	24名	アウトドア好き集まれin達古武 カヌーでヒシ刈り、自然を再生！	湿原再生小委員会（環境省釧路湿原自然保護官事務所）
9月27日	6名	釧路湿原が危ない！直線河川を蛇行河川に戻す取組み ※自然再生現場見学会「旧川復元」（茅沼）	旧川復元小委員会（釧路開発建設部治水課）
9月29日	25名	カヌーDE清掃in達古武湖	環境コンサルタント株式会社＆釧路町達古武オートキャンプ場
10月13日	11名	鶴の居られる村　タンチョウのえさづくり	タンチョウコミュニティ
3月13日	約70名	釧路湿原の水の動きを探る！	水循環小委員会（釧路開発建設部治水課）
7月28日 8月10日 9月14日		湿原の恩恵を受けてうまれた「咲くサクッキー」の販売 ・阿寒湖夏祭り会場・FMくしろ春採夏祭り会場 ・リバーサイドフェスタ2013会場	釧路短期大学
イベント合計数：18件（内1件未実施）／参加者計：301名			

13

＜参考＞ 「クリーンウォーク」の参加人数

- 「釧路湿原ボランティアレンジャーの会」では、湿原周辺の清掃活動を概ね月1回実施している。実施回数は悪天中止等もあり年により7～12回と差があるが、毎年少なくとも延べ二百人以上の参加を得て継続している。

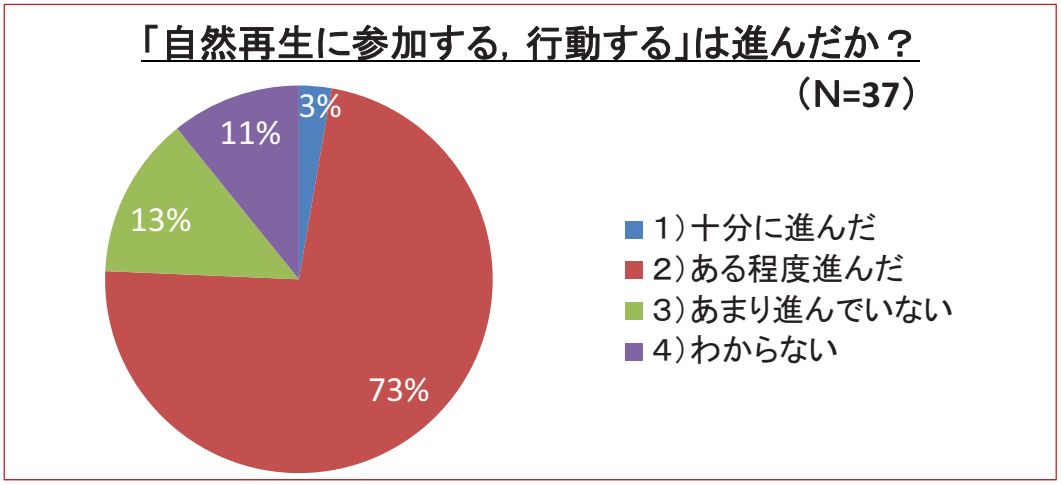


	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
参加者数（人）	249	406	－	296	120	233	193	210	238
実施回数	9	12	－	8	7	10	10	9	10

14

＜参考＞　協議会アンケートの結果から

- 一部ではあっても再生に取り組む団体や活動の存在は評価されており、協議会（小委）の取組を含めて、参加機会の存在は認識されている。
- 参加機会自体はまだ不十分であり、周知や参加者の拡大、活動自体の掘り起こしや巻き込み等を期待する声が多い。
- 市民参加の促進に向けた協議会としての戦略の必要性、普及小委の役割等についても意見があった。



15

3．実施状況（3）地域と関わり、人をつなぐ

- 英語による海外への情報発信や途上国行政官研修による国際交流（釧路国際ウェットランドセンター）、マウンテンバイクによるツアー（釧路湿原MTBクラブ）や車いすマラソン（同実行委）などの新たな湿原来訪者・接点づくり、ワークキャンプ等新たな滞在スタイルの実現（鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ）などが近年継続的に実施されている。
- 協議会では、小委毎の地元住民向け現地見学会を実施してきているほか、湿原の再生保全と観光振興の両立に向けたモデルプロジェクトとして、鶴居村及び鶴居村観光協会との協働により「鶴居村釧路湿原流域ガイドマップ」を作成した。

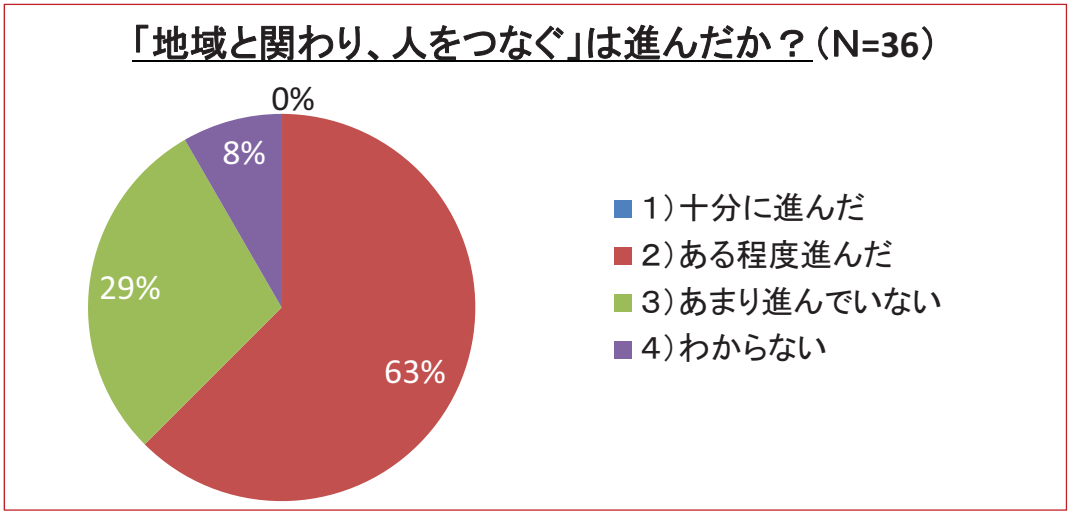
鶴居村でのガイドマップづくりWS

長期滞在者にも好評だった見学会（久著呂川）

16

＜参考＞　協議会アンケートの結果から

- タンチョウ・コミュニティの活動、KIWCによる国際交流、カヌーツーリズムの普及等の他、近年は協議会による鶴居ガイドマップづくりや婚活企画などが新たな取り組みとして着目され、そうした交流・連携のメリットを当事者は実感している。
- 地域の関心喚起や地域貢献策の提案、基幹産業とのネットワーク等の必要性がさまざまに指摘されている。
- 具体的なインパクトには至れていないことや周知の不足等、「地域の持続的発展」に向けてはなお課題が大きい。



17

4. 行動計画オフィス（WG事務局）の活動状況

- 第2期行動計画では、従前のWG運営や情報収集発信に加え、「自然再生に参加する・行動する」の促進をより重視し、自然再生の一般向け解説・広報、現場見学会をとおした地域・市民とのコミュニケーション、ワンダグリンダ登録団体による自然再生への参加機会作りの支援や集中広報等に重点的に取り組んできた。
- さらに、小委での議論を踏まえ、「地域と関わり人をつなぐ」の先導モデルとして、前述のとおり、鶴居村・同観光協会との協働により「鶴居村釧路湿原流域ガイドマップ」の制作等に取り組んだ。
- 第1期計画以来のワンダグリンダ・プロジェクトの運営や情報発信のノウハウは蓄積したが、第2期では新たな重点分野への取組を大幅に強化したため、事務局の業務量は限界に達している。

18

＜参考＞再生普及行動計画オフィス（事務局）の活動の推移

（○：実施・継続、◎：実施に加えて新たに作成・拡充等を行ったもの）

	第1期再生普及行動計画					第2期再生普及行動計画				
	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014(予定)
行動計画作成	◎				◎			中間評価		◎
〃　進捗把握・活動支援		○	○	○	○	○	○	○	○	○
〃　普及版作成	◎	○	○			◎	○		○	
〃　〃　英語版作成	◎	○	○				◎			
ワーキンググループ開催	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ワンダグリンダ募集・広報	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ワンダグリンダ報告書発行		○	○	○	○	○	○	○	○	○
ワンダグリンダ交流会		○	○					○	○	
ワンダグリンダサポーター				○	○	○	○	○	○	○
ワンダグリンダ登録証発行							○	○	○	○
パネル作成・出展等		◎	◎	○	○	◎	◎	◎	○	○
航空写真の出展・貸出							◎	○	○	○
WEBサイトの運営	○	◎	○	◎	○	○	○	◎	○	○
ニュースレター発行		○	○	○	○	○	○	○	○	○
メディア広報・働きかけ							○	○	○	○
知名度アンケート		○	○	○	○	○	○	○	○	
フィールドワークショップ				○	○	○	○	○	○	○
「自然再生の今」の広報						◎	○	◎	○	○
地元向け現場見学会							○	○	○	※支援
自然再生参加機会拡充								○	○	○
地域産業との連携検討							○	○		○
鶴居ガイドマップ制作								○	◎	

※　学校教育に関しては、2007年度に設置された「環境教育ワーキンググループ」が平行して実施している。

19

5. 第2期行動計画の成果

① 第1期からの継続により、釧路湿原に関わる活動の産学官民の活動ネットワークは一定の規模で定着し、長年継続して活動する団体の存在や行事参加者数等から、圏域の関心層には一定の認知が得られているものと考えられる。

② ワンダグリンダプロジェクトへの登録者も増加傾向にあり、活動の多様性も広がりつつある。

③ 2012年から開始した「自然再生に参加する・行動する」の集中広報や事業支援により、市民への自然再生への参加機会を一定規模で提供でき、リピーターも現れている。

④ 鶴居村でのガイドマップの作成は、協議会が目指す地域産業との連携の方向性を地図という形で見える化させることができた。ガイドマップは地元や関係者には好評であり、今後の活用が期待される。

⑤ 以上、第1期計画からの継続でもある「釧路湿原を知る、楽しむ、学ぶ」の継続・拡大、「自然再生に参加する、行動する」の実働、「地域と関わり人をつなぐ」の推進等、第2期計画の3つの重点分野に関して、それぞれ前進をみることができたと考えられる。

20

６．第２期行動計画の課題

① ワンダグリンダの参加者数や多様性は引き続き広がりつつあるが、自然再生への参加・行動については（第1期よりは増加したものの）、担い手となるには負担が大きく、自発的には進みにくい。

② 加えて、釧路湿原自然再生事業は公共事業であり、地域や市民が直接参加できる機会は限られる。今後、計画レベルでの参画、継続的なモニタリング、環境教育等を含め、市民参加の可能性や進め方を再確認する必要がある。

③ 地域への貢献については端緒についたばかりである。今後、一次産業との連携等も見据え、地元や関係者とのコミュニケーションの強化から着手することが必要な状況にあると考えられる。

④ ワンダグリンダや参加・行動機会を含めて地域・市民の認知は十分ではなく、広報に関する戦略が必要である。

⑤ こうした非定型的な業務にシフトしていくなかで、事務局体制を確立、強化が必要と考えられる。

資料

全体構想第5章6「持続的利用と環境教育の推進」関連指標の状況

2014年6月20日（金） 再生普及小委員会

1

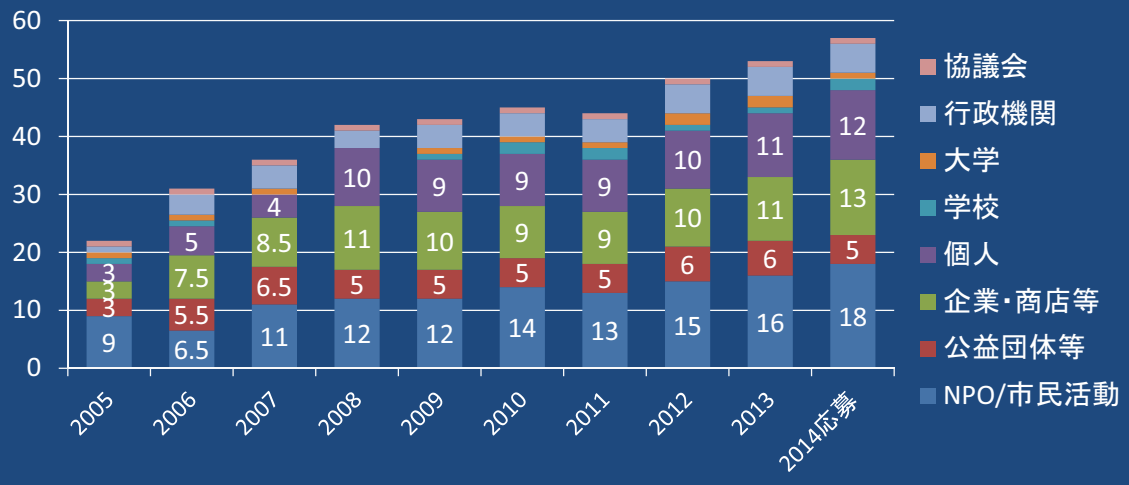
全体構想第5章
6 持続的な利用と環境教育の促進

1. 環境教育の充実とネットワーク化
2. 自然再生事業の情報発信と市民参加の推進
3. 湿原の利用に関するガイドライン・ルールづくり
4. 地域産業の持続的発展のあり方の検討
5. すぐれた景観の保全

2

【全体構想】 1. 環境教育の充実とネットワーク化
1-1 ワンダグリンダ・プロジェクト参加状況

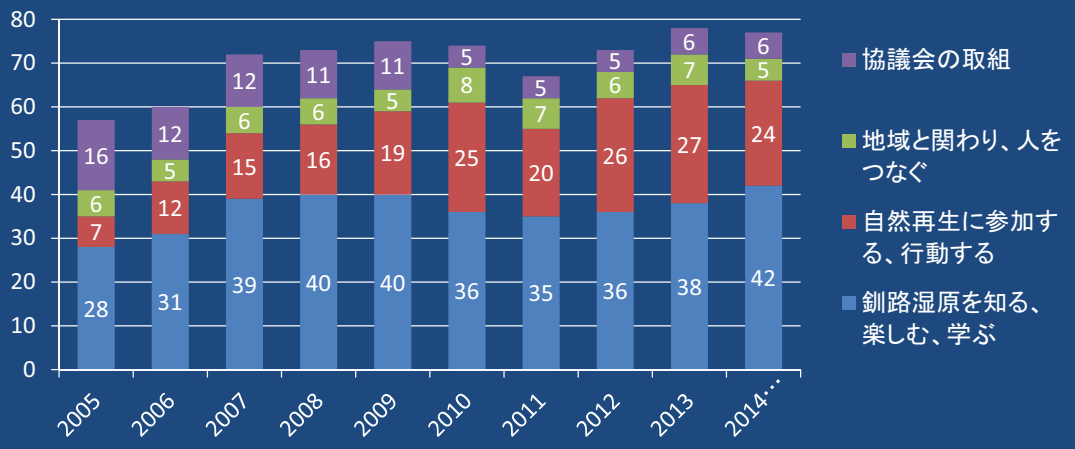
●産官（公）民が比較的バランスよく参加し、増加傾向にある。
●教育機関の参加は少なく、一次産業の参加は得られていない。



3

【全体構想】 1. 環境教育の充実とネットワーク化
1-2 ワンダグリンダ・プロジェクトの活動分野

※ 応募活動を事務局が第2期行動計画の3分野に分類したもの。
● 「自然再生に参加する・行動する」の取組件数は増加傾向にある。



4

【全体構想】 1. 環境教育の充実とネットワーク化
1-3 行動計画オフィス（WG事務局）の活動状況

（○：実施・継続、◎：実施に加えて新たに作成・拡充等を行ったもの）

	第1期再生普及行動計画					第2期再生普及行動計画				
	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014(予定)
行動計画作成	◎				◎			中間評価		◎
〃 進捗把握・活動支援		○	○	○	○	○	○	○	○	○
〃 普及版作成	◎	○	○			◎	○		○	
〃 〃 英語版作成	◎	○	○				◎			
ワーキンググループ開催	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ワンダグリンダ募集・広報	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ワンダグリンダ報告書発行		○	○	○	○	○	○	○	○	○
ワンダグリンダ交流会		○	○					○	○	
ワンダグリンダサポーター				○	○	○	○	○	○	○
ワンダグリンダ登録証発行							○	○	○	○
パネル作成・出展等		◎	◎	○	○	◎	◎	◎	○	○
航空写真の出展・貸出							◎	○	○	○
WEBサイトの運営	○	◎	○	◎	○	○	○	◎	○	○
ニュースレター発行		○	○	○	○	○	○	○	○	○
メディア広報・働きかけ							○	○	○	○
知名度アンケート		○	○	○	○	○	○	○	○	
フィールドワークショップ				○	○	○	○	○	○	○
「自然再生の今」の広報						◎	○	◎	○	○
地元向け現場見学会							○	○	○	※支援
自然再生参加機会拡充								○	○	○
地域産業との連携検討							○	○		○
鶴居ガイドマップ制作								○	◎	

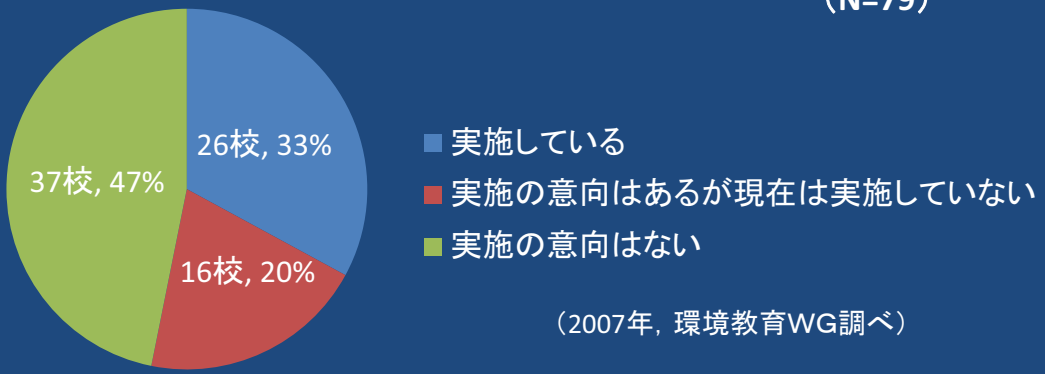
5

【全体構想】 1. 環境教育の充実とネットワーク化
1-4 学校教育での湿原の活用状況

- 釧路湿原集水域の学校を対象とする調査によれば、半数以上の学校が湿原を活用した教育の実施意向を持ち、約1/3が実際になんらかの形で教育に活用していることがわかった。
- 実施校における時間数や授業内容、活用方法等は多様であり、関心はあっても実現できない学校も多い。

湿原を題材またはフィールドとする教育活動の実施状況

（N=79）



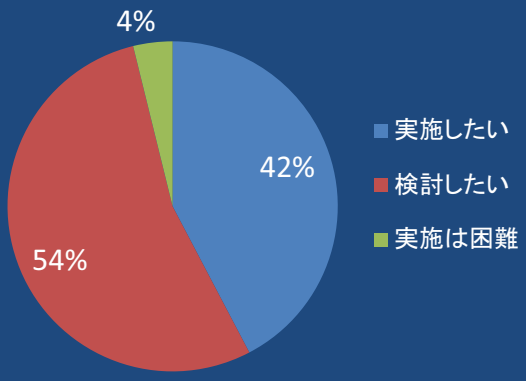
（2007年，環境教育WG調べ）

6

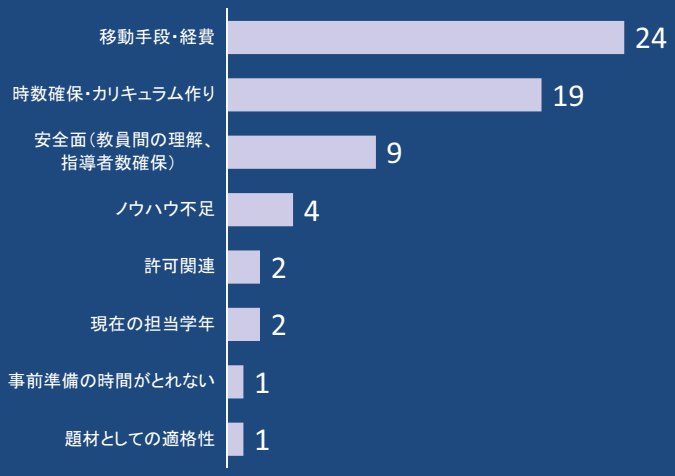
【全体構想】 1.　環境教育の充実とネットワーク化

1-5　学校教育での湿原活用の課題
（2009～2013年度の教員研修参加者による評価）

湿原を活用した学習の実施意向
（N=78）



学校教育での湿原活用の課題（複数回答）

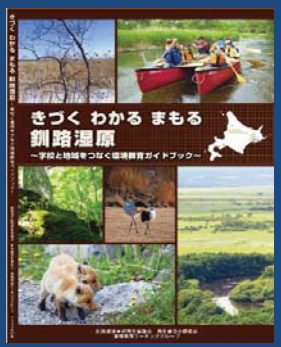


7

【全体構想】 1.　環境教育の充実とネットワーク化

1-6　環境教育WGによる学校教育支援

環境教育WG（2007年設置）は、目的を湿原を活用した学校教育の支援に特化して活動している。主な実績は以下のとおり。

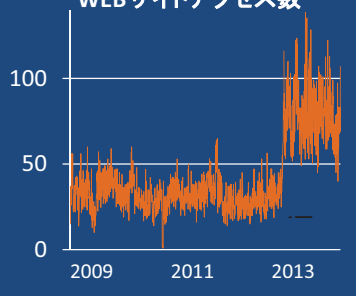


- 事例集「きづく わかる まもる 釧路湿原」の発行
  ･･･　湿原学習授業プログラムと外部協力団体等の情報源
- 湿原を題材とした学習資料の制作・提供（2013年～）
  ･･･　教科単元で使える（指導要領準拠）学習素材等
- 学校教育支援のためのWEBサイト（kushiro-ee.jp）運営
  ･･･　授業事例紹介や教材のダウンロード等

フィールドでの教員研修（塘路）

- 教育委員会との連携による教員研修講座　･･･　2009年～9回実施、延べ96名参加。毎回好評でリピーター（延べ32名）が得られ、教員による実践に貢献してきている。

WEBサイトアクセス数



8

＜参考＞　学習資料の活用状況

- 学習指導要領の改訂（2009年）に伴い、「総合的な学習の時間」は、小学校中学年で105→70時間に、同高学年で110→70時間に削減され、湿原を活用した学習の拡充は以前よりも困難が予想され、影響が想定される。

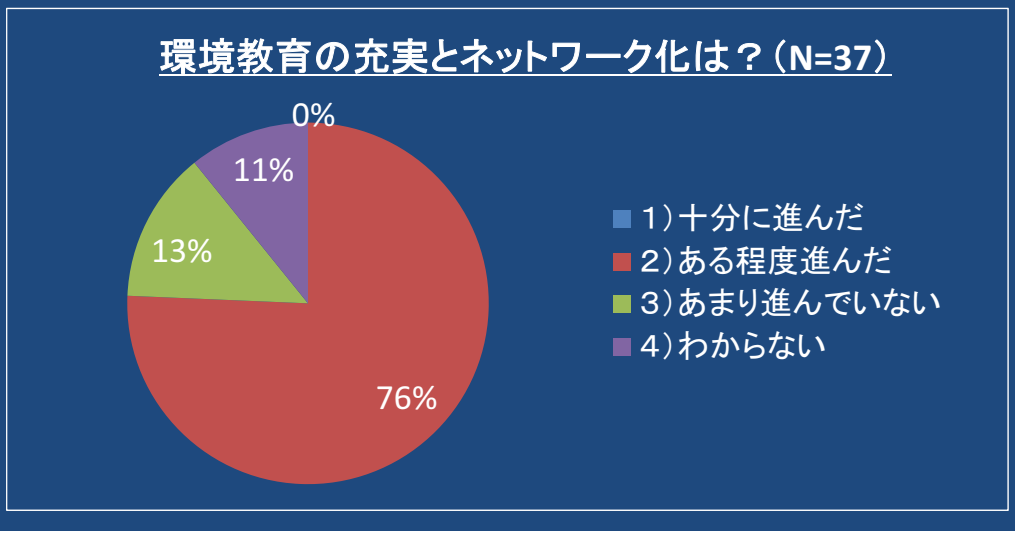
- 環境教育WGでは本年5月に、2011年時点で湿原を活用した学習を継続していた9校を対象に実践状況や環境教育WGの成果の活用状況等を調査した。その結果、6校から回答が得られ、以下の状況がわかった。

① 現在の湿原を活用した授業の実践状況
→ 同様または一部変更して実施　：　3校
→ 現在は実施していない　：　3校
② 実践事例集、WEBサイト等の認知状況　→　知っている：　5校
③ 学習資料の活用状況　→　①で実施中の3校では、指導の参考、児童の関心喚起を図る資料としての活用、児童による調べ学習で活用。
④ 学習資料等の活用可能性
→ 総合・教科での積極的活用を検討：　2校
→ 総合での活用を検討　：　3校

9

【全体構想】 1.　環境教育の充実とネットワーク化
1-7　協議会アンケートより

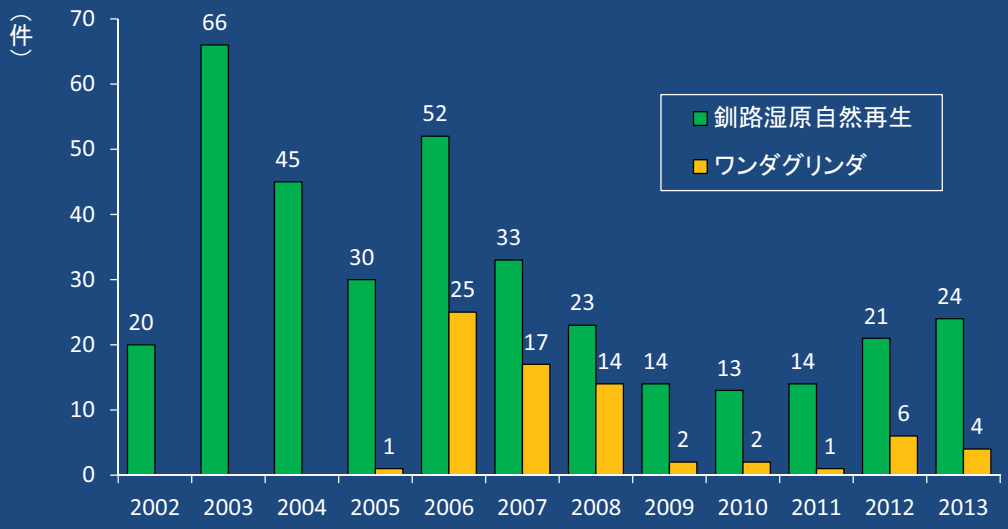
- ワンダグリンダ等により活動が見える化したことは評価されている。
- 学校教育については、協議会の活動は評価されている反面、教育現場での実践・普及には依然として課題があることが指摘されている。
- 協議会としてこの分野の到達目標をより明確化することや戦略を持つ必要性が指摘されている。



10

【全体構想】 2. 自然再生事業の情報発信と市民参加の推進
2-1 釧路湿原自然再生に関する報道状況

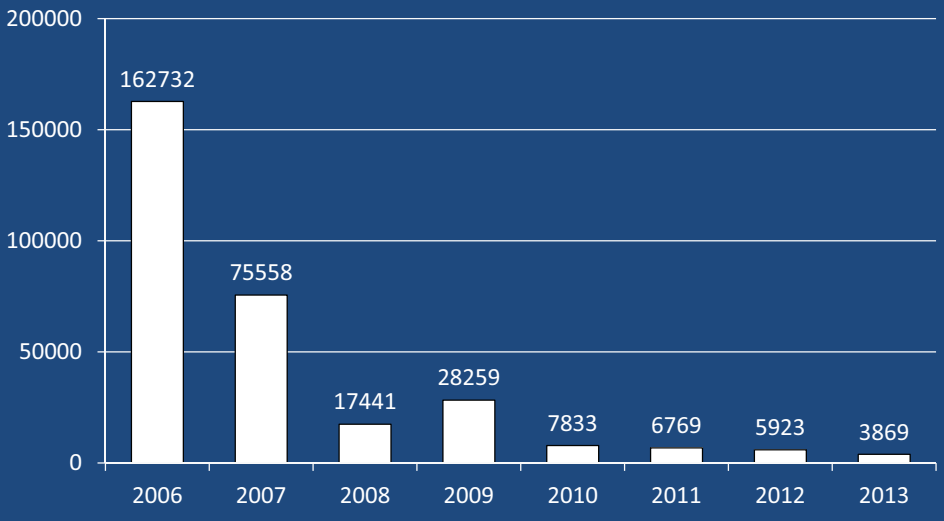
※ 「日経テレコン21」で、朝日・毎日・読売・日経・道新・NHKニュースを検索。
- 「自然再生」「ワンダグリンダ」とも、初期以降は報道数が減少している。



11

【全体構想】 2. 自然再生事業の情報発信と市民参加の推進
2-2 WEBサイトへのアクセス数

- 協議会ホームページへのアクセスは減少傾向にある。（各小委のサイトに直接アクセスする場合もあり、それらはカウントされていない）



※ 2010年度以前は第17回協議会（2012年2月15日）資料より、2011年度以降は釧路開発建設部治水課提供資料より作成

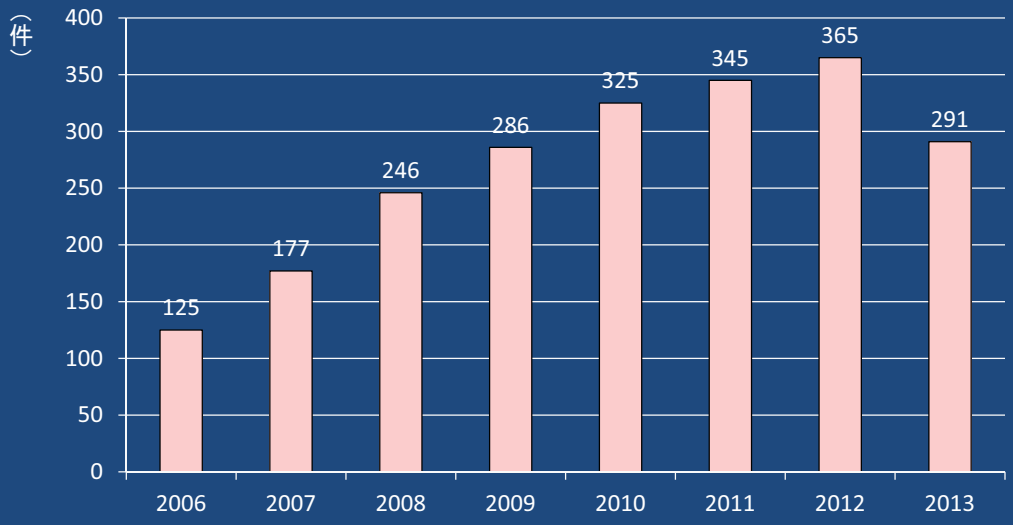
12

【全体構想】 2. 自然再生事業の情報発信と市民参加の推進

2-3 ワンダグリンダニュースの配信数

- メディアとしては大きくなく、かつ、自然再生事業そのものではなくワンダグリンダをはじめとする行事や募集情報配信している。

※ 2013年度は無効アドレスの処理等を行ったため、配信数が減少した。

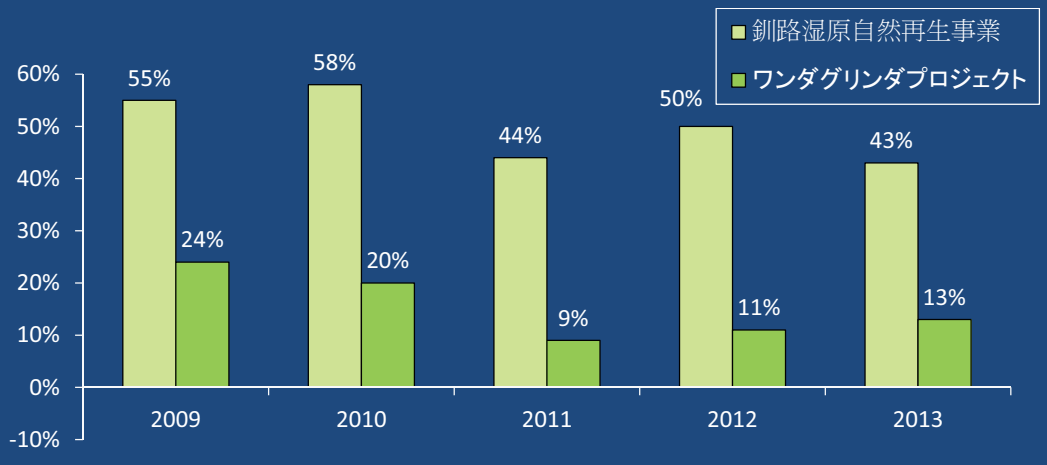


13

【全体構想】 2. 自然再生事業の情報発信と市民参加の推進

2-4 知名度アンケートの結果

※ JR釧路駅、イオン、温根内ビジターセンターで毎年約200～250人に「釧路湿原自然再生事業」や「ワンダグリンダ」の知名度を聞き取り調査し、「知っている」と答えた人数の割合を記載した。<u>統計的な調査ではないので、あくまでも参考程度</u>。

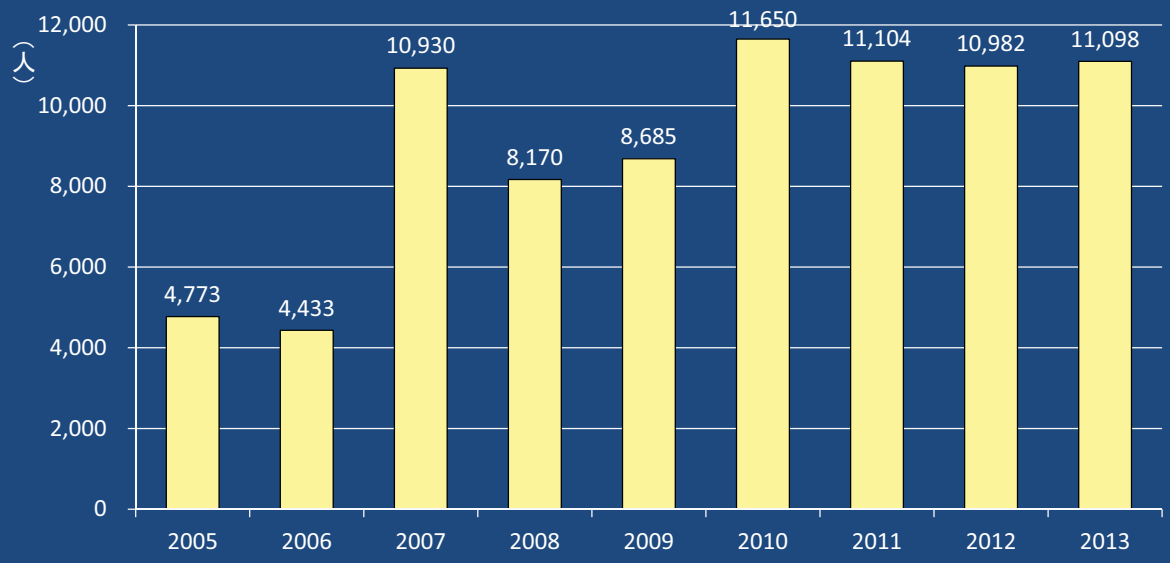


14

【全体構想】 2. 自然再生事業の情報発信と市民参加の推進

2-5 協議会による市民参加行事の参加者数

※ ワンダグリンダ報告書に記載のある数値の単純合計であり、あくまで参考程度だが、記載分だけでも毎年延べ1万人以上が湿原と何らかの接点を持っている。



15

【全体構想】 2. 自然再生事業の情報発信と市民参加の推進

2-6 協議会への寄付金

- 個人やイベントからの寄付の他、釧路短大からは咲くサクッキー売上げの一部を継続してご寄付いただいている。（ワンダグリンダ・プロイジェクト参加活動）
- これまで積極的な寄付募集を行ってこなかったが、今後はその活用とともに寄付の拡大を目指す方向で検討中。

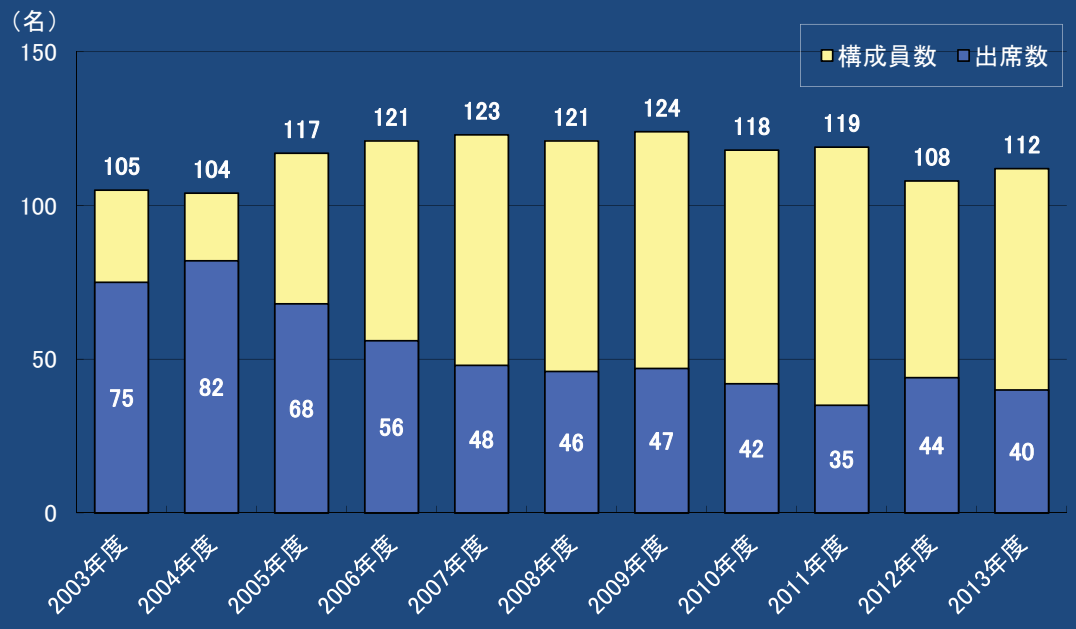
年度	収入	支出	残高
2004	125,400		125,400
2005	12,000		137,400
2006	550,000		687,400
2007			687,400
2008	7,060		694,460
2009			694,460
2010	16,775		711,235
2011	31,981		743,216
2012	40,186	11,350	772,052
2013			772,052
計	783,402	11,350	

16

【全体構想】 2. 自然再生事業の情報発信と市民参加の推進

2-7 協議会構成員・出席者数の推移

- 協議会の構成員に大きな増減はないが、事業方針レベルへの参加機会としての協議会への出席率は当初段階よりは下がってきている。

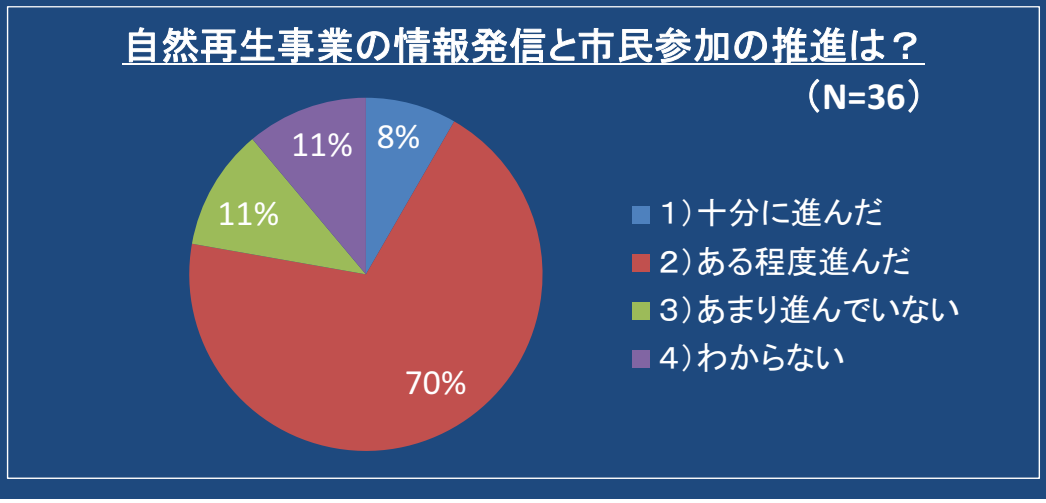


17

【全体構想】 2. 自然再生事業の情報発信と市民参加の推進

2-8 協議会アンケートより

- ワンダグリンダの諸活動や協議会による参加機会づくりは一定の評価を得ている。
- 情報が一部の人にしか届かず参加が広がっていないこと、自然再生への理解や参加に足る情報発信や地元とのコミュニケーションの不足等の課題が指摘されている。

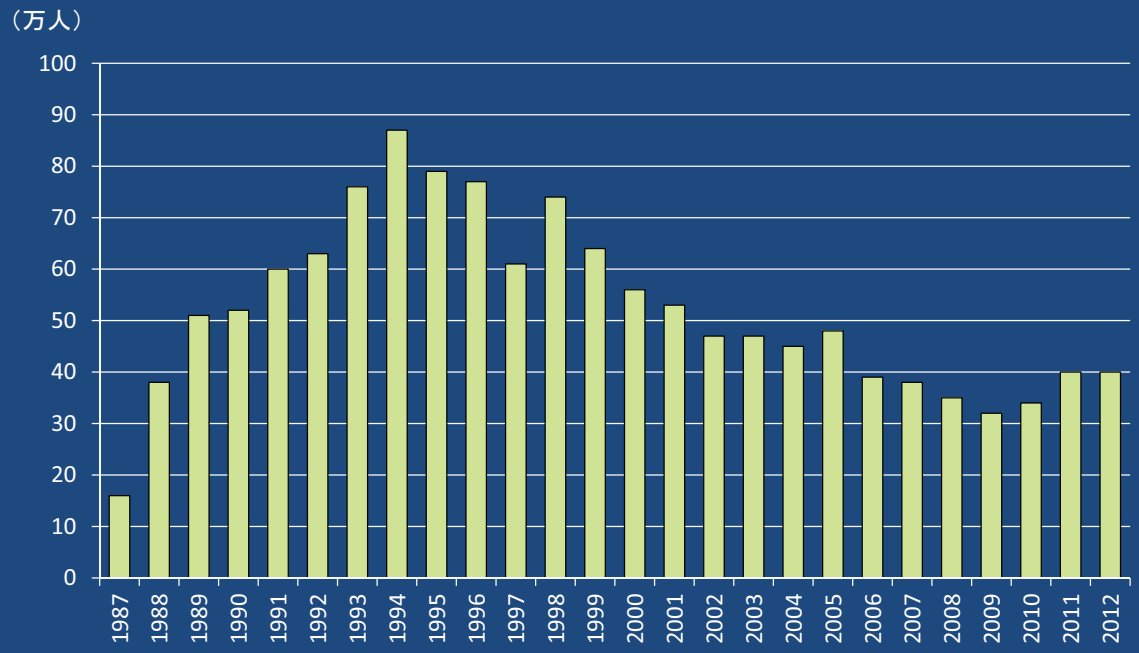


18

【全体構想】 3. 湿原の利用に関するガイドライン・ルールづくり

3-1 釧路湿原国立公園利用者数の推移

- 長期的には低落傾向だが近年はやや持ち直している。

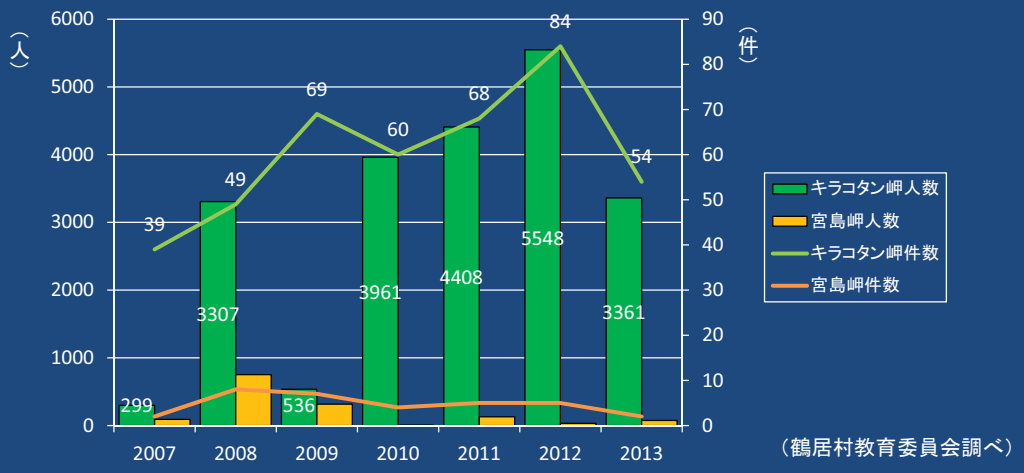


19

【全体構想】 3. 湿原の利用に関するガイドライン・ルールづくり

3-2 キラコタン岬・宮島岬（天然記念物）許可数

- キラコタン岬については高い水準の入り込みが続いている。



（鶴居村教育委員会調べ）

※ 2010年度以降の人数はガイド業者等による申請段階での見込みであり，実績値はない。
※ 宮島岬については教育委員会把握分のみの数値。

20

【全体構想】 3. 湿原の利用に関するガイドライン・ルールづくり

3-3 湿原に関するガイドブック等の発行状況

※ 釧路湿原国立公園の保護・利用を目的とする過去10年の主な刊行物。

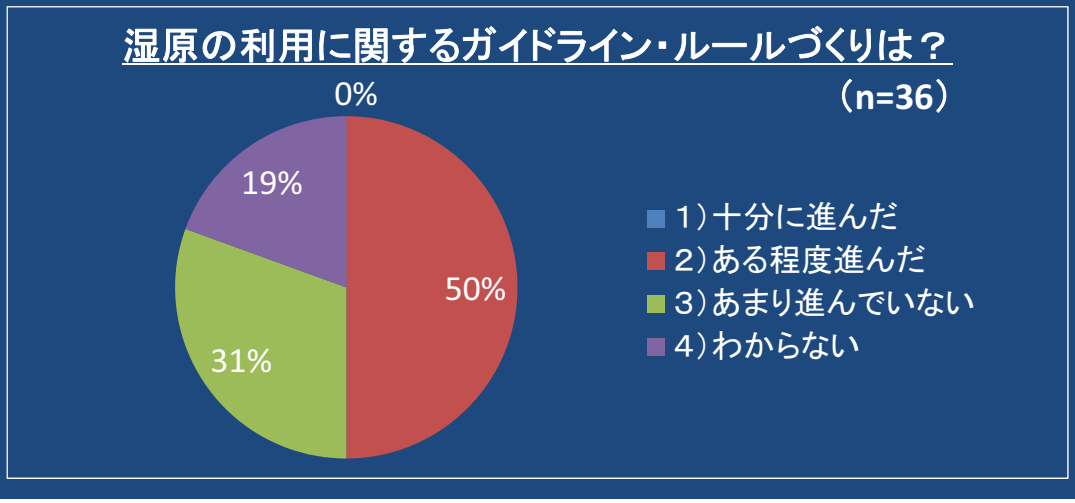
① 「釧路川保全と利用のカヌーガイドライン」，釧路湿原自然再生協議会，2004年
② 「釧路湿原国立公園」，釧路湿原国立公園連絡協議会,2004年初版/2008年第2版/2012年第3版，477円+税
③ 「釧路湿原 保全と利用総合ガイド」，釧路湿原自然再生協議会，2005年，667円+税
④ 「釧路湿原国立公園パークガイド」，自然公園財団，2012年，477円+税
⑤ 「鶴居村釧路湿原流域ガイドマップ」，釧路湿原自然再生協議会・鶴居村・同観光協会，2014年

21

【全体構想】3. 湿原の利用に関するガイドライン・ルールづくり

3-4 協議会アンケートより

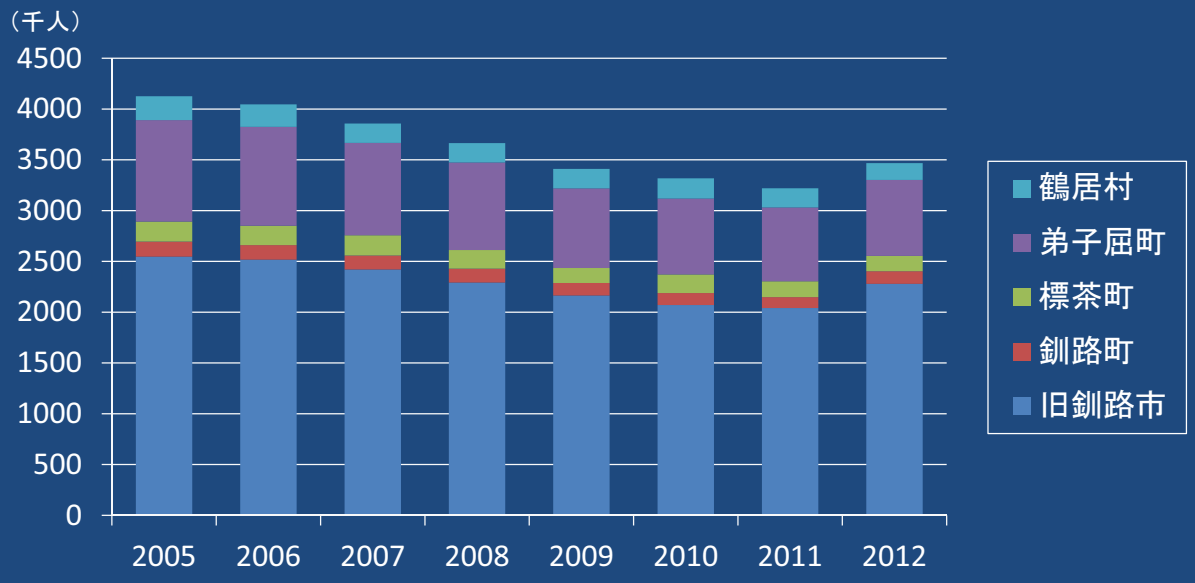
- カヌーガイドラインの策定（2004）の策定及びルールを記載したガイドマップ刊行などの成果が得られ、エコツーリズムの浸透を評価する声もある。
- 釣りやキラコタン等、オーバーユースに対応するガイドラインの不足を指摘する声が多い。また、作成されたガイドラインの周知不足や実効性への疑問、地域振興との両立の必要性等が指摘されている。



22

【全体構想】４．地域産業の持続的発展のあり方検討
4-1　釧路湿原流域市町村の観光客入込数

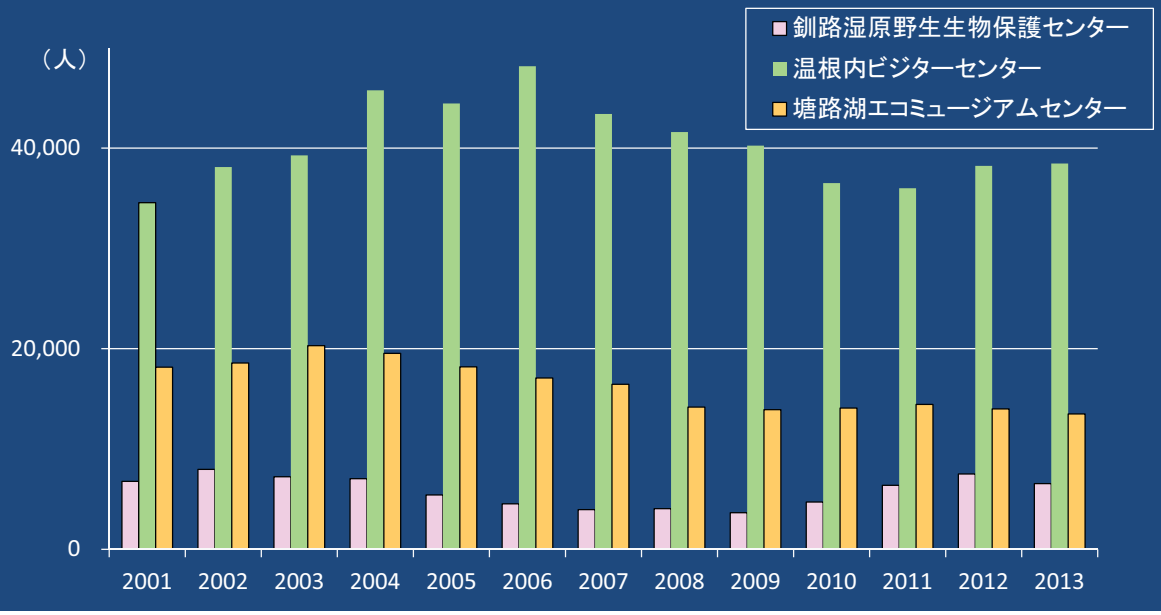
- 道内外長期的には低落傾向にあるが、管内への海外からの入込みは直近急増している。



23

【全体構想】４．地域産業の持続的発展のあり方検討
4-2　湿原周辺関連施設の利用者数

- 木道散策の拠点となる温根内ビジターセンターの利用者数が多い。



24

【全体構想】 4. 地域産業の持続的発展のあり方検討

4-3 自然再生と地域産業の連携に関する動き

① 釧路湿原やちの会の修学旅行受け入れ、有料ガイド活動等（鶴居村）

② 標茶高校・カムイ・エンジニアリング株式会社による水質浄化実験（ワンダグリンダに参加）

③ タンチョウコミュニティ（鶴居村）によるタンチョウの経済効果試算（村内7.5億円）

④ 茅沼地区旧川復元区間のカヌーツアーでの活用

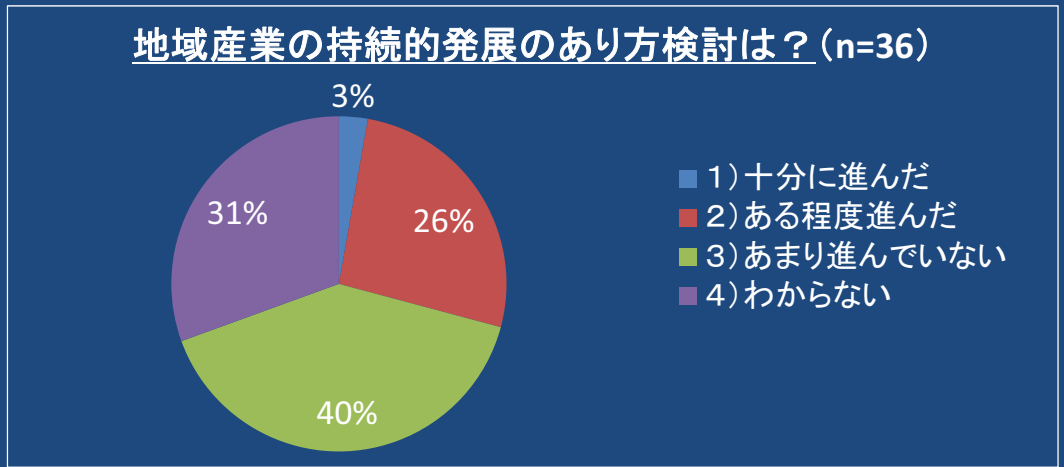
⑤ 「鶴居村釧路湿原流域ガイドマップ」の刊行（2014年）

25

【全体構想】 4. 地域産業の持続的発展のあり方検討

4-4 協議会アンケートより

- 協議会による鶴居村ガイドマッププロジェクトは一定の評価を得ており、地産地消や産消交流、グリーンツーリズムなどの動きも認知されている。
- 反面、まだ成果が不十分で、基幹産業等地域の広い支持には至らないこと、地域産業との両立に向けた「検討」自体の不足、地域との対話や交流の不足がさまざまに指摘されている。



26

【全体構想】５．すぐれた景観の保全

5-1　景観に関する近年の動き

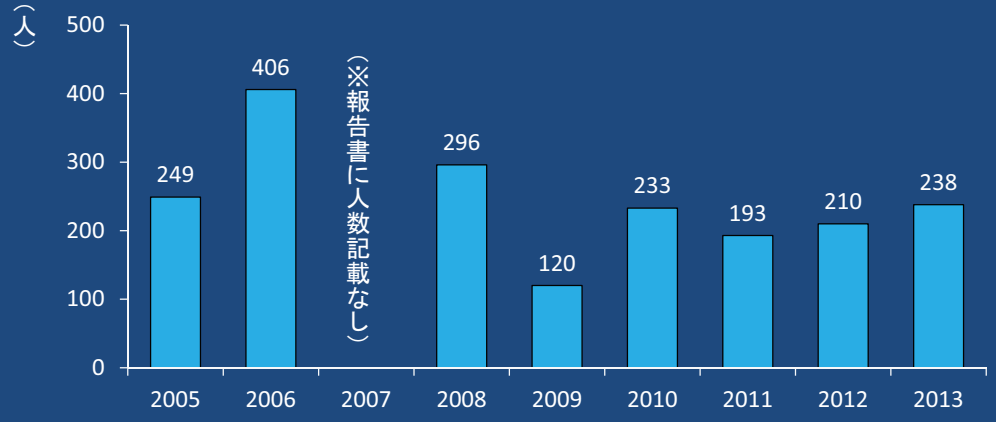
① 旧川復元（茅沼地区）
② 釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイのルート指定（2006年）
③ 釧路湿原国立公園クリーンデー（釧路湿原国立公園連絡協議会）の実施（毎回100人前後が参加）
④ 野積み廃車の減少（廃棄物法制強化の成果？）
⑤ 湿原を見下ろすレストラン（鶴居村）のOPEN（2014年）

27

【全体構想】５．すぐれた景観の保全

5-2 「クリーンウォーク」への参加者数

- 「釧路湿原ボランティアレンジャーの会」では、湿原周辺の清掃活動を概ね月1回実施している。実施回数は悪天中止等もあり年により7～12回と差があるが、毎年少なくとも延べ二百人以上の参加を得て継続している。

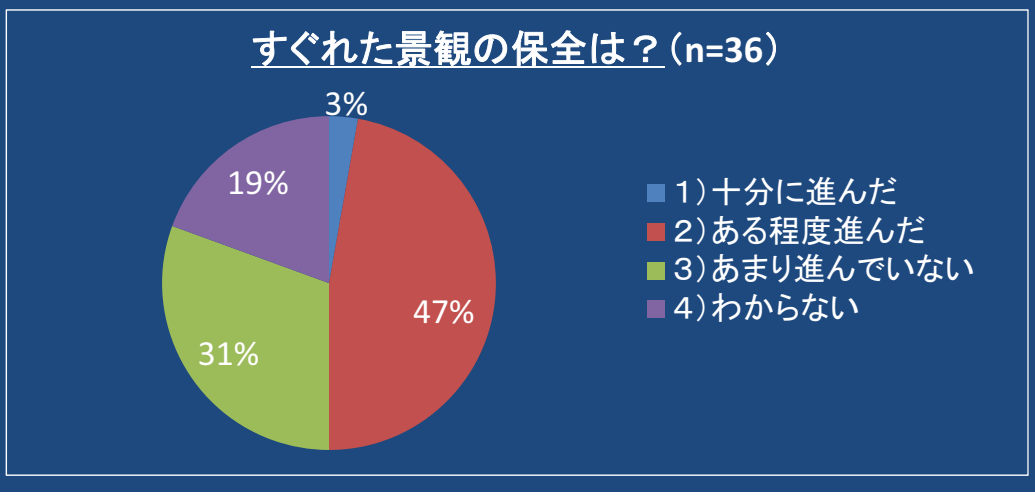


28

【全体構想】５．すぐれた景観の保全

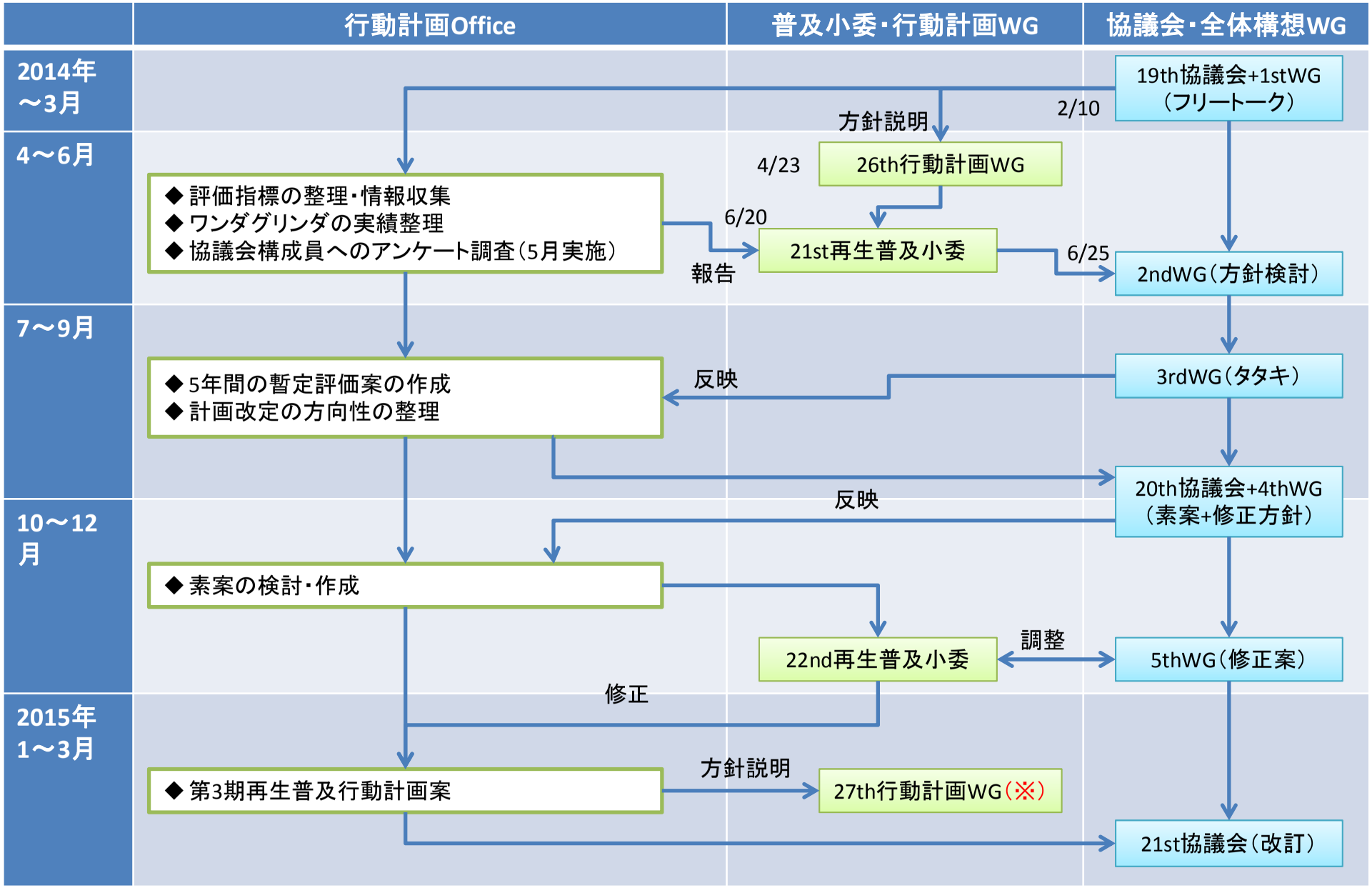
5-3　協議会アンケートより

- 旧川復元を湿原の景観回復の成果として評価する声がある。
- 野積み廃車の減少や団体・企業による清掃活動への評価が高い。
- 伐採や工作物による景観問題の存在や、景観保全の取組が見えないこと、方向性を議論する必要性等が問題提起されている。
- 展望地の景観確保のための樹木の成長管理、公園利用施設の劣化、不法投棄対策等の必要性も指摘されている。



29

行動計画改定手順（案）



※ 全体構想及び行動計画の見直し内容次第で、WG構成や役割等が変わる可能性がある。

①

釧路湿原自然再生全体構想及び再生普及行動計画見直しのためのアンケート 調査の集計結果

2014 年 6 月 20 日 再生普及小委員会事務局

1. 調査の目的

釧路湿原自然再生全体構想（2005 年 3 月／※）及び第 2 期釧路湿原自然再生普及行動計画（2010 年 1 月）の見直しに向けて再生普及小委員会として検討するにあたり、両計画に関する協議会構成員の認識や意向を把握する。（統計的な分析が目的ではない））

※ 本調査では、全体構想中「第 5 章 6 持続的な利用と環境教育の促進」を対象とする。

2. 調査方法等

○ 調査対象： 釧路湿原自然再生協議会構成員及び関係機関
○ 調査方法： 電子メールに調査票を添付して送信し回収（一部構成員には郵送）
○ 調査期間： 2014 年 4 月 22 日（火）送信・発送～5 月 30 日（金）回収終了
○ 回収率： 33.0%（37 団体／112 団体・個人）

3. 質問項目

【質問1】 全体構想の施策の柱の一つに「持続的な利用と環境教育の促進」（全体構想 p32～35）があり、次の 5 つの目標が立てられています。それぞれの達成度について、あなたの考えに最も近い選択肢を一つだけ選んで○で囲み、成果・課題と感じることをキーワード等で簡潔に記入してください。

Q1-1 環境教育の充実とネットワーク化
Q1-2 自然再生事業の重宝発信と市民参加の推進
Q1-3 湿原の利用に関するガイドライン・ルール作り
Q1-4 地域産業の持続的発展のあり方
Q1-5 すぐれた景観の保全

［選択肢：1)十分進んだ 2)ある程度進んだ 3)あまり進んでいない 4)わからない］

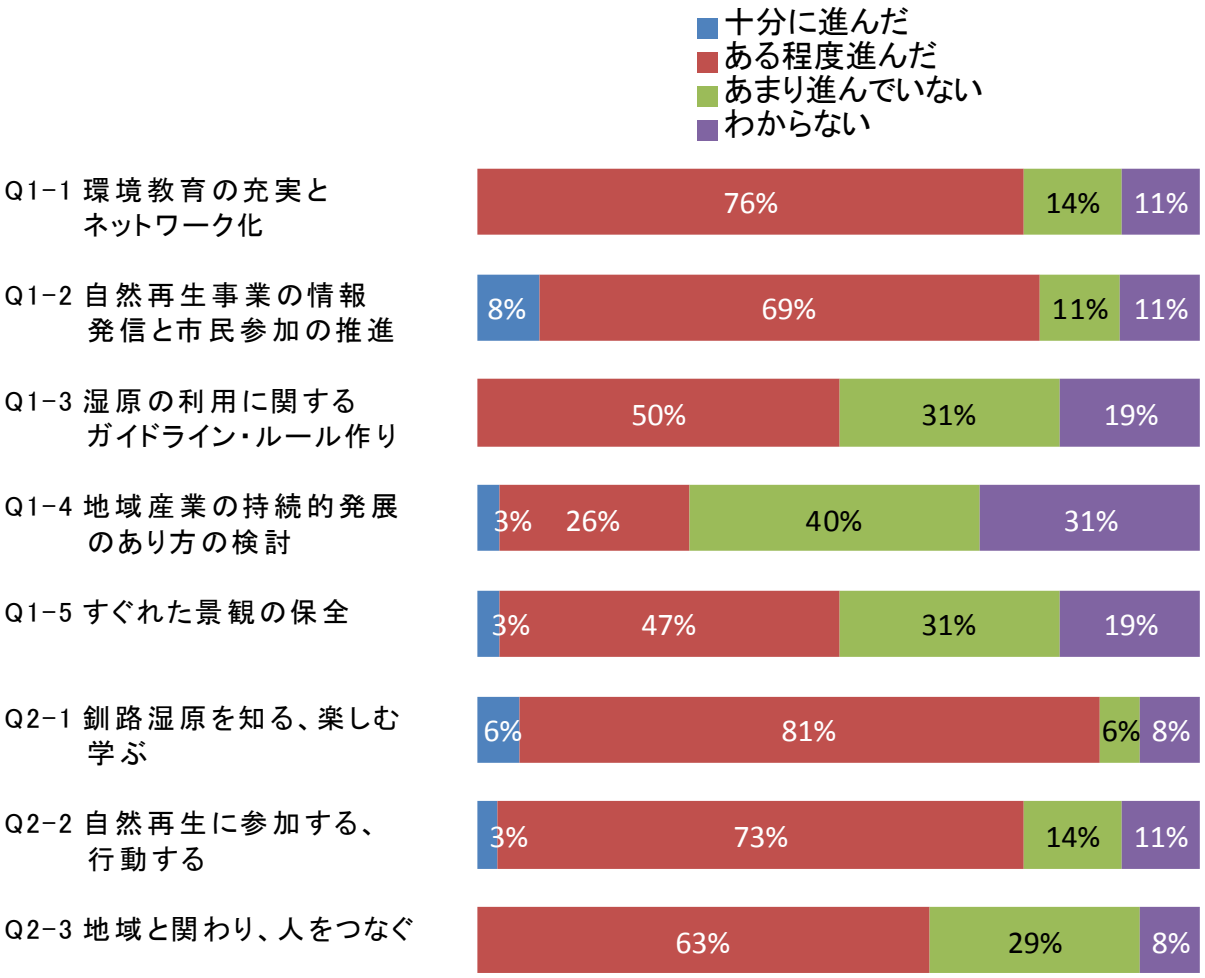
【質問2】 再生普及行動計画は、次の 3 つについて「できる者」が「できること」から取り組むことを前提に進められてきました。それぞれの達成度について、あなたの考えに最も近い選択肢を一つだけ選んで○で囲み、成果・課題と感じることをキーワード等で簡潔に記入してください。

Q2-1 釧路湿原を知る、楽しむ、学ぶ
Q2-2 自然再生に参加する、行動する
Q2-3 地域と関わり、人をつなぐ

［選択肢：1)十分進んだ 2)ある程度進んだ 3)あまり進んでいない 4)わからない］

【質問 3】 全体構想及び再生普及行動計画の見直しにあたり、期待すること、考慮すべきこと、その他あなたのご意見をお聞かせください。（自由記入）

4. 選択肢回答の状況



回答件数（件）	十分に進んだ	ある程度進んだ	あまり進んでいない	わからない
Q1-1 環境教育の充実とネットワーク化	0	28	5	4
Q1-2 自然再生事業の情報発信と市民参加の推進	3	25	4	4
Q1-3 湿原の利用に関するガイドライン・ルール作り	0	18	11	7
Q1-4 地域産業の持続的発展のあり方の検討	1	9.5	14.5	11
Q1-5 すぐれた景観の保全	1	17	11	7
Q2-1 釧路湿原を知る、楽しむ　学ぶ	2	29	2	3
Q2-2 自然再生に参加する、行動する	1	27	5	4
Q2-3 地域と関わり、人をつなぐ	0	22.5	10.5	3

※ 小数点は複数回答を按分したために生じたもの。

5. 自由記入欄の記載事項

■Q1-1 環境教育の充実とネットワーク化（n=37)）

＜成果＞

①ワンダグリンダ・プロジェクトの成果

○ワンダグリンダ・プロジェクト。
○ワンダグリンダに参加する団体が増えている。
○湿原を身近なものと感じられるワンダグリンダ・プロジェクトの普及。
○ワンダグリンダニュースやホームページを活用して､様々な公的機関や NPO 等の団体が湿原について理解するための場や機会を積極的に提供している。
○HP の充実。例えばワンダグリンダ関連の活動等。
○「ラムサール 30 周年湿原たからばこ」等で多くの活動が確認された。

②湿原との接点づくりと関心喚起

○湿原への関心を高めるために､人々と湿原との接点を増やすような場･機会をつくる。
○市民と接する諸活動をして成果がある。
○ネットワーク化により湿原の関心は年々高まってきていると思います。
○湿原マラソン。

③学校教育の進展

○環境教育を学校のそばの自然で実施する学校が増えた。
○小中学校の教職員の関心が増した。
○教員研修等に継続して参加する教員がいるなど、湿原を題材にした環境教育に関心を持つ教員が増えてきたこと。
○学校教員への研修、授業教材の作成等は重要な成果。（※全体構想５章６（３）では「学校教育」や「教材」は②（情報発信）に入っていますが、①の手法・成果というべきだと思います。）
○湿原を題材にした教科学習の単元の作成と活用が、開始されたこと。
○環境教育ガイドブックが完成したこと。WG 活動を通じた教育委員会や教育大学との連携（教員研修の実施等）。ワンダグリンダ・プロジェクトの始動。
○湿原関係の環境教育教材が充実した。

④全般・その他

○行動計画 WG や環境教育 WG に蓄積された事例の存在と継続。標茶高校の活動。
○環境教育が充実することには注目したい。
○学びのプログラム。
○行政の取り組み。
○構成員名簿。
○住民参加。

＜課題＞

①ネットワーク・連携の問題

○ただし、各団体の横の繋がりが希薄である。
○現況では各主体が個別に環境教育を行っている場合が多いものと思われ、流域全体の中での湿原をテーマに環境教育を行う場合、各分野に知見を有する者の連携が必要と感じる。

②学校教育への期待

○学校教育での湿原活用の気風の不足（衰退）。（総合学習の時間数減少、新学習指導要領の施行により、ますます学校では実施する優先度が低下）
○学校の経営計画に環境教育目標を設定し、具現化されなければならない。
○学習指導要綱の中でまだまだ位置づけが弱い。
○学校関係者の関心の低さ。
○学校側（教育委員会）がもっと関わることが必要。
○（せっかく道教育庁や関係市町村がメンバーに入っているのに）「学校教育」との連携が不十分。
○教育現場での取り組み、そして取り組みが少ないと感じる。
○今後、教育現場で湿原を教材として活用すべきと思います。
○学校教育、マスコミの活用。
○具体的な指導方法が確立していない。
○環境教育に関する継続した取り組みができる体制づくり。いかに湿原を通した環境教育をカリキュラムの中に位置づけていけるか。
○環境教育に関心を持つ教員の拡大の方法。

③取組の目標・戦略の問題

○具体的には「何を目的とした」ネットワークを構築するのか？
○この課題の目標像（ゴール）が分かり難い。
○釧路湿原を中心とした環境教育における目指す湿原の姿が分かりにくい。
○環境教育や自然再生イベントに参加する機会は増えたが､PR が十分に行き届いていないこと。性別、年齢、職業、上流部に在住なのか、下流部に在住なのか、意識又は無意識的に釧路湿原にどのような影響・関与を及ぼしているのか等を区分（セグメンテーション）し、どの区分を対象に（ターゲリング）、どのような意識・行為をするようにしたいのかを明確にした上で、環境教育のプログラムや広報の考え方を検討するというプロセスではなく、漠然とやっているところが課題。
○ワンダグリンダのポスターは見かけるが、実際の取り組み内容が分かりにくい。
○更なる情報周知。
○関心を高めるための工夫。
○環境教育という言葉になじみが無く、関心が低いと感じる。

④全般・その他

○道民の意識。
○体験型環境教育に毎年スタッフとして参加しているが、運営や引率にかなりの人員が必要で、今後拡大をしていくためにはそれ相当の費用と覚悟が必要と感じている。
○これまでの取り組み等の報告があると分かりやすいと思います。
○専門家以外は触れてはいけないものとして湿原を認識している。

■Q1-2　自然再生事業の情報発信と市民参加の推進　（n=36）

＜成果＞

①ワンダグリンダ・プロジェクト等の成果

○ワンダグリンダ・プロジェクトや「釧路湿原の自然再生に参加しよう！」市民参加イベントの実施等により、様々な形の自然再生への市民参加の形があることが認知・啓発できたこと。
○「ワンダグリンダ」により、それまでの個々の活動がまとまりを持って発信されるようになり、活動に関する情報が活発に流通するようになった。
○ワンダグリンダ・プロジェクト。
○ワンダグリンダ・プロジェクト等で市民の参加が確認できる。
○市民向け講演会、ワンダグリンダ・プロジェクト。
○ワンダグリンダ・プロジェクトや「釧路湿原の自然再生に参加しよう」市民参加イベントの実施等により、様々な形の自然再生への市民参加の形があることが認知・啓発できたこと。

②協議会の取組

○協議会のホームページや小委員会開催の現地学習の充実。ワンダグリンダへの参加状況。
○2013 年度の小委員会毎の見学会は参加者から大変好評であり、継続が期待される。
○各小委員会がそれぞれの自然再生サイトにおいて、市民参加の取り組みを行う体制が構築されたこと（ALL 協議会として実施できたこと）。
○普及小委員会が中心となり「参加」の機会を提供し、参加が得られた。
○各小委員会がそれぞれの自然再生サイトにおいて、市民参加の取り組みを行う体制が構築されたこと。
○自然再生協議会や各小委員会の議論の内容を HP で公開し、かつ、印刷物（Newsletter）として配布しており、自然再生事業の実施状況と課題についての情報を求める者が常にアクセスできる環境が整っている。
○再生事業現場を市民とともに定点調査する活動が続いている。
○行政の取り組み。

③市民参加

○市民参加による釧路湿原内部の現地調査。
○市民参加のイベントなど行事が行われた。
○市民参加型の体験イベントが多く企画されている。
○湿原クリーンウォークなど、市民提案の中から生まれてきている。
○市民を接する諸活動をして成果がある。
○ターゲットの明確化、地域振興との両立を図ることが、市民参加の促進・新たな市民参加の層の開拓につながることが明らかになったこと。

④全般・その他

○各種媒体を活用して、自然再生事業の必要性や内容を効果的に伝える。
○情報発信はある程度進んでいると感じる。
○関心を持つ市民が少しは増えたと思う。
○学校教育での教材。
○地域の学校教育への参画。

＜課題＞

①情報発信・コミュニケーションの課題

○情報発信を一部関係市民ばかりでなく、マスコミの機動力を通して一般化させる。
○どの程度の方が情報発信を受けているのか不明。
○情報発信がいつも同じような人にしか伝わらず、その方法（どこに・どのように発信するか）を変える必要性がある。⇒効率的な情報発信（例えば、マスコミや各施設とWin-Win の関係を構築することで、こちら側だけが情報発信しなくても良い仕組みを作る。SNS の活用など。）
○これまでの取り組み等の報告があると分かりやすいと思います。
○自然再生イベントに参加する機会は増えたが、PR が十分に行き届いていないこと。性別、年齢、職業、上流部に在住なのか、下流部に在住なのか、意識又は無意識的に釧路湿原にどのような影響・関与を及ぼしているのか等を区分（セグメンテーション）し、どの区分を対象に（ターゲリング）、どのような意識・行為をするようにしたいのかを明確にした上で、環境教育のプログラムや広報の考え方を検討するというプロセスではなく、漠然とやっているところが課題。
○全体構想に記載の下記事項については、更なる努力が必要。（情報のデータベース化と公開／湿原の社会経済的価値と湿原を守ることの利益についての情報発信／自然再生事業への参加を通じた釧路地方への来訪・滞在することの魅力の創出（当機関の事業への参加者について言えば、すべて地元の者））
○多くの人にその成果が見えていない。
○再生事業の意義を幅広く周知できていない。
○自然再生事業に関する地元の関心や理解は不足しており、地域とのコミュニケーションの強化が必要。
○地域住民が自然再生事業をどのように感じているのか、よく分からない。
○個々人でも取り組まれている人とコンタクトを取る。

②市民参加の課題

○市民参加活動の持続性。ボランティア活動従事者に甘えていないか？
○まだ一部の人の参加にとどまっている。
○市民参加がまだ少ないように思う。
○今後、更に市民参加のイベントを増やすべきと思います。
○内容が専門的すぎて、一般市民には理解しづらい。
○市民参加については、素人が簡単に出来るものばかりではないので、大きな運動にするためには前項（Q1-1「感じる課題」）同様に覚悟が必要か。
○もっと多くの市民を巻き込むことが必要かと。
○イベント等参加者の固定化・高齢化。
○自然再生の市民参加促進と地域活性化と両立の促進。

③全般・その他

○道民の意識。

■Q1-3　湿原の利用に関するガイドライン・ルールづくり　（n=36）

＜成果＞

①カヌーガイドライン

○釧路川カヌーの適正利用ガイドラインを策定し、地元カヌー団体内では一定の認知・活用がなされていること。
○釧路川保全と利用のカヌーガイドライン。
○「釧路川保全と利用のカヌーガイドライン」が作成されたこと。
○「釧路川保全と利用のカヌーガイドライン」及び「釧路湿原保全と利用総合ガイド」の作成。
○カヌー利用に関わる自主的利用ガイドラインが定められた。

②ガイドブック等

○ガイドブックの作成。
○「鶴居村 釧路湿原流域ガイドマップ」には、地域情報の提供も加えて、釧路湿原の法的規則について触れている。

③エコツーリズム

○湿原について深く学習したり、再生活動や地域産業に参加したりするなどの「エコツーリズム」型利用を推進する。
○（画期的なガイドライン・ルールが作成されたわけではないが）エコツアー型利用等の考え方は概ね浸透しており、各々の利用形態の中で配慮されているようにみえる。

④全般・その他

○利用者が利用しやすいガイドラインの取り組みがされた。
○利用のガイドラインやルールづくり。
○ガイドライン。
○行政の取り組み。
○国立公園の拡張があった。
○各種研究については、データの蓄積や成果が報告されている。

＜課題＞

①ガイドラインの不足

○ガイドラインを早く完成すべきだと思います。
○釧路湿原での釣り利用に対する一定のルールづくりの必要性。⇒まずはルールを作ることより、釣り人への周知啓発が重要。
○キラコタンのオーバーユースなどの問題が生じているが、自然保護団体や地元ガイドの皆さんの間での問題意識にとどまっている感があり、問題の所在が地元にも知られていない。適正利用への具体的な誘導や、それを担保するルールづくりはほとんど進んでいないように感じる。
○ガイドライン、ルールに関しては、まとまっていないと感じる。
○観光客など外部からの訪問者を対象にしたルールづくりが必要となる。
○観光客による安易な湿原への立ち入り。
○釣りなどその他レクリエーションについても今後マナーの啓発が必要と思われる。
○国有地の中をいじくっているだけ。周辺の農地までは全く同意形成が図られていない。
○ガイドブックの作成は一部地域に限定。地域をさらに広げていくべき。
○ガイド等の作成は行ったが、必ずしも湿原利用者が入手しているとは限らないため、利用の適正な誘導を図るための標識等の整備は必要と考える。

②周知・活用不足

○どこにそのガイドラインが広報されているのか分からない。
○多くの人にその成果が見えていない。
○多様な意見をどれだけ取り入れられるかが課題。

③地域振興との両立

○湿原周辺の湖沼におけるワイズユーズと既得漁業権の問題。
○湿原の冬季適正利用の促進においては、ルールづくりだけではなく、うまく地域振興につなげる仕組みをつくることが重要。

④全般・その他

○道民の理解、湿原との向き合い方、自然への感謝。
○利用者が環境構成の一員としての自覚を持ち、積極的に行動できる体制をつくる。
○一般市民からの意見も聞く。
○これまでの取り組み等の報告があると分かりやすいと思います。
○特になし（「ガイドライン」等は、作成しなくても問題が生じないならそれ（作成しない）に越したことはない。）

■Q1-4　地域産業の持続的発展のあり方の検討　（n=36）

＜成果＞

①鶴居村でのモデルプロジェクト

○「鶴居村 釧路湿原流域ガイドマップ」の作成を通して、地元市町村及び関係者に、釧路湿原の保全・再生が観光業などの地域産業にとっても有益であることを理解してもらったこと。
○鶴居どさんこ牧場の利用者増加、外国人観光客の増加、鶴居村での協議会と地域振興サイドとの連携による地図づくり等。
○鶴居村釧路湿原流域ガイドマップの作成を通して、地元市町村及び関係者に、釧路湿原の保全・再生が観光業などの地域産業にとっても有益であることを理解してもらったこと。
○鶴居村釧路湿原流域ガイドマップ。

②連携に向けた動き

○地域産業のネットワーク化が進んだと思います。
○生産者と消費者の交流。
○「環境の保全」と「地域の産業・経済」の両立のため、「湿原利用者」と「生産者他地域住民」との交流を図る努力は行っている。
○地産地消の考え方が普及してきた。
○グリーンツーリズムとして、一次産業と観光を両立されている例も多い。
○環境保全活動に対する市民意識が広まっている。

③技術関連

○環境基準点における BOD、愛国浄水場取水口のアンモニア態窒素濃度。
○環境への負荷が小さい技術を導入するため、資金的な支援を促進する。
○環境負荷の軽減技術。

＜課題＞

①成果が不十分

○上記のとおり進んだ面もあるが、基幹産業をはじめ、自然再生が地域から広く支持、期待される状況には至っていない。ワンダグリンダでも直接ここに挑戦する活動は少なく、担い手が不足している。流域での「環境負荷低減」の動きがよく見えない。
○全体構想に記載の下記の事項について、成果が上がったものがあれば、積極的な情報発信が望まれる。（環境への負荷が少なく、持続的に自然を利用できる技術の開発／上記技術を導入するための資金的支援の促進／環境保全と地域の産業発展が経済的に両立するための生産者と消費者の交流）
○「地域人口の減少」「観光客の減少」に見られるように、「地域産業の持続的発展」に成功しているとはいえない。（ただし、“「環境教育の促進」が不十分なこと”が主な原因とはいえない。）
○注目する顕著な成果についての情報は得ていない状況。
○成果がよく分からない。
○検討内容が伝わってこない。

②検討の不足

○環境の保全と産業の発展の具体的な検討が無い。
○環境保全が経済活動にとってプラスであるという証明が不十分。
○地域産業の発展と釧路湿原の保全・再生をいかに両立させていけるかもっと検討していく必要がある。⇒自然再生の取り組みを今後促進できるかのポイントとなりうる。
○自然再生事業活動と地域住民の幸福度向上をどう融合させるのか？
○自然に対する企業の理解（誤認）と産業のそもそものあり方（錯誤）。
○湿原がもたらす恵みによる産業の発展がまだ限定的のままとなっている。
○環境保全が際立つことで経済活動の制限が強調される側面がある。
○再生させるための方向性を決める。
○人が入りすぎる例よりも、人の手がかけられなくなっている物が多い。

③対話・交流の不足

○地域産業の担い手とのコミュニケーション不足。⇒もっとお互い（釧路湿原の保全と再生、地域産業）を知る必要がある。
○地域産業の発展は、行政と企業、市民の交流を図るべきだ。
○関係者全てのニーズを把握し、全員が納得できる形づくりが必要。
○街づくりの積極性が感じられない。
○ガイドマップを活用したイベントの機会を増やしてほしい。

④具体的な対策や支援の必要性

○特に酪農経営にあたっては、農業化学肥料薬品の河川流入阻止に努力できる援助が必要。
○技術開発や支援は行われているのでしょうか。
○堆肥の散布時期、家畜排泄物の管理。

■Q1-5　すぐれた景観の保全　（n=36）

＜成果＞

①自然再生の取組み

○蛇行復元や湿地復元等、具体的な自然再生が実現している。
○茅沼の旧川復元。
○トラストサルンの土地確保。
○各種自然再生事業で顕著な成果はまだ見られないが、自然景観の維持・改善については、各事業主体が実施計画に基づき取り組んでいる。
○植生等の保全・修復によって、自然景観の維持・改善を図る。

②野積み廃車対策・清掃活動

○野積み廃車などが減少している。
○野積み廃車減少。様々な団体や企業等による清掃活動の実施。
○「野積み廃車」の問題のように、改善している面も多い。
○様々な団体や企業等が清掃活動を行っており、観光地周辺のゴミが減ったこと。
○ボランティアによる清掃活動が盛んである。
○社会貢献活動が増えた。

③景観維持

○配慮ある利用により、景観は悪化していない。
○毎年湿原に行くが、景観はいつもすばらしい。
○優れたといえるかどうか分からないが、何かは成果が出来たのでは？
○夕日と湿原。
○鶴居村での湿原や農村景観を望むカフェやレストランの増加と周知。

④住民意識

○地域住民に景観について意識の高揚が図られたと思います。
○地域住民への景観への関心高揚。

＜課題＞

①景観悪化

○キラコタン岬頂上付近の林業活動（大規模な皆伐）は残念。景観的にも土砂流出の面でも、またイメージ的にも大きなマイナスであると考えられる。
○人為的な景観悪化の改善。
○湿原周辺の私有林の伐採の増加。
○メガソーラー施設の建設による景観への影響。
○湿原の周辺地には、廃屋や壊れたまま放置された工作物が見られ、景観を損ねかねない状況。しかしながら、公共の福祉に反しない限り国民の権利は憲法の下で尊重されなければならず、法令等に違反していない限り関係行政機関が所有者に撤去を求めることは出来ないため、限界があると言わざるを得ない。

②方向性や目標の明確化の必要性

○周辺環境まで含めると保全出来ているのか分からない。
○どのような保全活動をしているのか伝わってこない。
○これもどのように具体化され、進めているのか分かりません。
○優れた景観とはどの様な景観なのか議論が必要。
○今後は、現在より景観を悪化させないようにすべきです。
○人工物に対する景観対策はほとんど行われてきていないのでは？
○更に広域的に進めていくことが必要。
○早急に保全・修復をすべき。
○保全のための個人レベルのアクションが分からない。
○これまでの取り組み等の報告があると分かりやすいと思います。
○湖沼を含む湿原景観及び湿原を取り囲む丘陵地景観等の保全。エゾシカの増加や外来種の侵入など、本来の生態系への脅威の防除。不法投棄が絶えないなど、住民の環境保全意識の向上が重要。
○保護区に隣接する普通地域に緩衝地帯がほしい。
○景観を維持するためにどこまで人の手を加えるかが課題である。

③展望地・施設等での対策の必要性

○湿原周辺の各施設において、適切な維持管理が行われていないこと。（樹木成長による展望台の眺望悪化、施設の老朽化など）
○訪問者が満足して景観を楽しめるよう展望台前の樹林の枝切りが必要である。
○国立公園等施設の劣化。（見苦しいのみならず、危険な箇所も出始めている。環境省が改善できるものは改善したいが、そうでないものも多い。）

④不法投棄対策

○不法投棄はいまだに減っていない。
○廃棄物に関しては、資金を投入して撤去すべき。

■Q2-1　釧路湿原を知る、楽しむ、学ぶ　（n=36）

＜成果＞

①ワンダグリンダ・プロジェクト

○ワンダグリンダ・プロジェクトが盛んに行われている。
○ワンダグリンダ登録活動に見る多様な関わり方の存在。
○ワンダグリンダ・プロジェクトの参加者が増えている。
○ワンダグリンダへの参加団体の増加。
○ワンダグリンダ・プロジェクトの普及。

②活動の広がり

○様々な形の「知る、楽しむ、学ぶ」が生まれたこと。　※これは第 1 期の成果とも言えるかも。
○湿原流域の様々な場所での啓発活動を通じて、新たな層に対して「知る、楽しむ、学ぶ」を伝えることができた他、各施設や関係者との関係構築につながった。
○普及小委員会や WG の努力により、人々が湿原に接する「入口」と「幅」は確実に広がっている。
○入り口と幅。
○多様なプログラムを作成して市民が参加しやすいようにされた。
○何度もフォーラムや現地体験活動などが行われた。
○釧路湿原に関わる視点の多様化。
○釧路短期大学大西教授の釧路再発見など。
○様々な機関や団体が行っている湿原散策や学習会にはシニア世代を中心に多くの者が参加し、釧路湿原を「知る、楽しむ、学ぶ」についての裾野の広がりを感じる。
○市民参加型の湿地体験活動。
○情報発信の仕方が良くなり、自然ふれあい行事への親子参加が増えた。
○自然再生に参加しよう！集中月間・広報開始。新たな層（若者・長期滞在者等）をターゲットとした活動の実施。
○釧路市湿原流域ガイドマップ。
○行政として取り組みはしている。
○普及活動の成果が表れている。
○釧路湿原の良さを世界中に知ってもらうこと。

③学校教育関係

○釧路湿原を教科単元の学習要素から捉えた学習資料の開発。
○環境省が作成した環境教育教材が充実している。
○子ども達を指導する教員の参加が増えている。

＜課題＞

①対象の拡大

○親子などが湿原事業に参加できる機会を作るべきと思います。
○次世代への継承。
○次世代への引き継ぎ。取り組みに関わる若年層の育成。
○年代を超えた広がりに力を入れる必要がある。
○更に新たな層に対してどのように「知る、楽しむ、学ぶ」を拡大していけるか。

②学校教育での強化

○小中学生等、若年層への教育・啓蒙・体験活動を更に拡充すべき。
○釧路湿原の現地学習を更に増やす。
○教育現場で生かされていない。
○町内会総会・PTA 研修会・校長会・教頭会などでアピールできる。

③担い手の拡大

○コアな活動団体は増えておらず、担い手が高齢化している。タンチョウや川など湿原に関わる題材を扱いながら、釧路湿原と関わりづけない授業等、学校で「釧路湿原」そのものが受け入れられにくい状況にある。
○湿原散策や学習会は人気が高く、すぐに募集人数に達してしまうので、開催情報を入手後、直ちに応募しなければならない、との声をしばしば耳にするところ。湿原に関する環境や生態を教えるためには、植物、動物、水質、土壌等多岐にわたる幅広い知識が必要であり、専門性も高いので、湿原について総合的に解説できる者は少ないものと思われる。このような者を養成する仕組みを考える必要があると思われる。
○ガイドマップで言えば、販売先の拡充。

④推進戦略

○将来どうすればいいか、という点が不鮮明。
○入り口と幅がこの取り組みによって広がったのかが分からない。
○今後、後の 2 つの柱にウエイトを置いていった際、いかに効率的に「知る、楽しむ、学ぶ」を促進していけるか。
○ネットワークづくりが難しい。
○「普及小委員会」が「自然再生協議会（各小委員会等）」全体の広報の役割を担うべき。（特に最近は意識的にそのように努めているが、“普及”のプロとして、より効率的な広報・発信に努めたい。）
○自然再生イベントに参加する機会は増えたが、PR が十分に行き届いていないこと。
○理解や意識が伴ってこないと意味がない。
○再生に対する理解度が低い。

■Q2-2　自然再生に参加する、行動する　（n=37）

＜成果＞

①参加の場の拡大

○協議会委員の増加や湿原保全に取り組んでいる各種団体の存在。
○市民参加型の湿地体験活動。
○一部の人々は参加し、行動している。
○できる者の活動は進んだ。
○ワンダグリンダ・プロジェクト展開。
○ワンダグリンダ・プロジェクト。
○多くの団体や個人のワンダグリンダ・プロジェクトへの登録と数多くの活動。
○関係企業の参加などが地域社会で普及しつつある。
○自然再生に参加、協力。
○体験学習会。
○グリーンホリデー（日本野鳥の会によるワークキャンプ）の人気、タンチョウの自然採餌場整備や、パークボランティアによる外来種駆除の定着、トラストサルンの保護地拡大等の民間活動。
○再生に向け積極的に試行錯誤しています。
○ターゲットの明確化、地域振興と両立を図ることが、市民参加の促進・市民参加の新たな層の開拓につながることが明らかになったこと。

②協議会の取組

○「釧路湿原の自然再生に参加しよう」市民参加イベントを実施し、ワンダグリンダ及び各小委員会の市民参加の取り組みを開拓・集約・PR できたこと。また、様々な市民参加の形があることを認知・市民等に PR できたこと。
○各小委員会がそれぞれの自然再生サイトにおいて、市民参加の取り組みを行う体制が構築されたこと（ALL 協議会として実施できたこと）。
○市民参加型の蛇行復元河川の経過観察体験などが実施されている。
○普及小委員会や WG の努力により、自然再生に参加する「機会」と「人」は確実に増えている。
○自然再生に参加しよう！集中月間・広報開始。各小委員会の事業との連携・参加機会提供開始。

③全般・その他

○河川改修の実効、元農地の原生回帰など、短期間のうちに現れてきている。
○全国的な注目を受けている。
○関係機関と連携を取りながら情報の発信がされたと思います。

＜課題＞

①間口の拡大

○活動参加者をいかに持続的に集められるか？道外ボランティアの受け皿が不十分ではないか？
○もっと多くの人に参加してもらいたい。
○「知る、楽しむ、学ぶ」者に対して、「自然再生に参加する、行動する」者が少ないと感じる（前者が後者に必ずしも結び付いていない）。
○湿原に関心を持つ人、自然再生に参加している人が増えたのか分からない。
○関心のない子どもへの働きかけのために、子ども会と連携した事業立案。
○私自身、実際に参加、行動する機会が少なくなっている。
○今後は関心があまり無い人も参加してもらえるような工夫を。
○参加者が固定化しているように感じる。
○やりたいけれど分からない人を巻き込んでいく。
○メディアによる情報発信（ネットの有効活用）。海外外国人（著名）の参加呼びかけ（日本人は外国人の発言は聞く傾向がある）。
○自然再生に参加する人を増やすための情報発信や手法などをもっと検討する必要がある。
○活動の周知・報告等のあり方。

②協議会としての戦略の必要性

○国・道の公共事業として進められているため、地域・市民が直接貢献できる手段が限られている。計画策定段階での地元とのコミュニケーションやモニタリングを継続的に地元と実施するなど、地域・市民の参加を実施計画レベルに織り込む必要がある。
○“自然再生に参加しているのにそのことを意識（自覚）していない”ケースがまだまだ多いと思われる。意識（自覚）してもらうためにも、「普及小委員会」が積極的に「自然再生協議会（各小委員会等）」全体の広報の役割を担うべき。　※Q2-1 の課題と同様。
○ワンダグリンダに登録できる活動内容をしている人材や団体の掘り起こし。
○自然再生の取り組みが全て理解されているとは限らない。

③全般・その他

○まだ自然を金儲けの道具程度に認識している人が目立つようである。
○環境教育。
○湿原が更に魅力あるものにすべきだと思います。
○早急に方向性を出し、再生事業を開始する。

■Q2-3　地域と関わり、人をつなぐ　（n=36）

＜成果＞

①具体的な取組の存在

○KIWC による JICA 研修の定着（湿原の国際協力への活用）。鶴居ガイドマップにより具体的な連携に着手したこと。
○鶴居のタンチョウコミュニティーの活動。
○カヌーでの婚活等、新しい企画がなされている。
○ツーリズムと飲食関係がつながってきている。
○釧路湿原カヌー、釧路湿原ツアー。
○当団体の産業祭り等への参加。
○「環境の保全」と「地域の産業・経済」の両立のため、「湿原利用者」と「生産者他地域住民」との交流を図る努力は行っている。
○官公庁ではなかなか手が出しづらい分野ではあるが、各ビジターセンターの施設は湿原を始めとする最新情報や魅力を積極的に伝える重要な拠点となっている。また、森林再生小委員会（環境省釧路自然環境事務所）が達古武オートキャンプ場宿泊者限定で実施している達古武の森林の散歩会は、官公庁としては先進的かつ意欲的な取り組みと考える。

②メリットの認知

○「鶴居村 釧路湿原流域ガイドマップ」の作成を通して、地元市町村及び関係者に、釧路湿原の保全・再生が観光業などの地域産業にとっても有益であることを理解してもらったこと。⇒自然再生の促進が、地域産業の振興にも寄与できることを確認できた。
○鶴居村釧路湿原流域ガイドマップの作成を通して、地元市町村及び関係者に、釧路湿原の保全・再生が観光業などの地域産業にとっても有益であることを理解してもらったこと。
○自然再生以外の視点（食や観光・出会いなど）を自然再生にマッチングさせることで、自然再生の促進と地域活性の両立ができる可能性があることを認知できた。
○市町村や関係機関などと Win-Win の関係を構築することができれば、更なる取り組みの拡大につながる可能性があることを認知できた。

③全般・その他

○一部の人々や行政はつながっているように感じる。
○私自身、自然が好きな人達のつながりが出来た。
○地域の宝としての自然を守る意識が共有されている。
○自然再生を支えるネットワーク。
○企業、メディアを含め、多様な呼びかけがありました。
○再生による地域産業と人材の育成。
○協議会が 10 年続いた。

＜課題＞

①地元とのつながり

○釧路湿原流域の様々な課題（地域産業の衰退、人口減少、学力低下など）解決に対して、釧路湿原の保全・再生がいかに貢献できるかをしっかり検討していくことが、今後の自然再生の発展にとって重要。
○地域にとって、自然再生は「国・道の取り組み」と認識されているため、地元からは連携や地域利益につながる具体的な提案が出にくいのではないか。協議会（実施者）側からもっと地域振興への貢献策を提案していく必要がある。
○Q1-4（地域産業の持続的発展のあり方の検討）と関連する事であるが、「流域を視野に自然再生と地域の持続的発展の両立を目指す取り組み」を進めるためには、サービス産業のみならず、流域の基幹産業である酪農関係者を始めとする農林水産業関係者も交えて、自然再生を支えるネットワーク作りが必要と感じているところ。
○まだ多くの人々はつながっていないように感じる。
○地域の人の意見を常に収集すること。
○地域住民の関心が薄い。
○関心のうすい住民への啓蒙。

②成果の不足

○「地域人口の減少」「観光客の減少」に見られるように、「地域産業の持続的発展」に成功しているとはいえない。（ただし、“「地域と関わり、人をつなぐ」取り組みが不十分なこと”が主な原因とはいえない。）　※Q1-4 の課題と同様。
○ネットワークはこの 10 年でどれほど形成されたのか分からない。
○成果が見えていない。
○具体的に広報されていないように思う。

③全般・その他

○地域のトイレ問題。快適で自由に可能な場所が少なく内地では不評。
○自然再生事業に参加しやすい仕組みを作るべきと思います。
○実際に自然を訪れる人の数はまだまだ多いとはいえない。
○ガイドマップを活用したイベントを増やすこと。
○各関係機関の横の連携を密にする。
○啓発活動のあり方。
○参加の形。

■Q3　全体構想及び行動計画見直しに対する意見

①地域との関わりの強化

○全体構想および再生普及行動計画については、地域住民との関わり合いが重要と考えられます。当協議会におきましても、「地域住民と地域産業が一体となって釧路川の水質汚濁を発生させない環境をつくる」という長期的な目標を掲げ、水質保全活動に取り組んでいるところです。各団体においても様々な活動が実施されていると思いますが、それらを情報交換することにより、より活発な活動につながれば良いと思います。
○どの内容も実施者と参加者、地域住民の意見を常に取り入れてイベントを企画、計画の策定をしていくことが重要だと考える。
○今後は、周辺の農地や町で行われる開発活動などについても行動計画の中に位置づけ、積極的にアプローチしていってほしい。

②環境教育・市民参加の戦略の再検討

○市民活動型の企画（ワンダグリンダ・プロジェクト）が活発に行われていることは、良いことと評価している。しかし、何が理想、目標でそのためにこれを行うといった目標とその過程が見えないので計画の見直しに関する評価が出来ない。また、この 10 年でこの普及活動により流域の市民をはじめ国民が、どの程度この活動を知っており、どのように思っているのか、その活動により市民、国民の意識がどのように変わったのかが分からない。見直しを行おうとするのであれば、上記の目標や現状が明確に示される必要があると思います。
○これまでと違った普及行動、メンバー構成（追加）、そこから出される考え、認識が求められる。同じことを繰り返していれば同じ結果となる。これまでの行政の取り組み、一部の市民は十分に頑張ったのではないか。これ以上同じことをしているだけでは変わらないように感じる。湿原という存在のあり方や視点も含めて見直していくことが必要と思う。今後、ますます厳しい社会情勢の中で、自然の存在は実は非常に大切な視点だと思うが、その視点は現状ではますます離れていくことになるように思う。自然とは何か、何の意味があるのか、抜本的に話し合う必要がある。そこからの再出発ができるかどうか？
○自然再生への市民参加・環境教育の促進・地域活性化との両立が、目に見えた成果が出てくるためにはある程度の期間が必要である。そのためには、短期的な結果にとらわれず、中期的なスパンで取り組みを行っていく必要がある。そのためには、行政側も予算においても中期的な視点に立って検討をしていく必要がある。一方で、将来的には地域社会が釧路湿原の保全・再生が地域にとって重要・メリットがあると理解した上で、行政ではなく地域が釧路湿原の保全・再生の取り組みを支援・実行していかなければ、自然再生の取り組みは地域に根付かず、継続されない。そのため、まずは行政側が、地域が取り組みを行っていけるようしっかりと支援する体制や取り組みを行っていく必要がある。
○全体事業の多くに関わっているわけではないので、有用な回答が出来ずすみません。私がごく一部の事業に参加してみて感じるのは、各方面での市民参加の難しさです。これだけを 1 年間専門にやっていくような担当を設けるくらいの出費と覚悟をしないと、「細々と」といった枠を超えられないような気がします。

③湿原の価値の発信

○地元の人には身近すぎて価値に気付きにくい、釧路湿原の貴重さや魅力を広く知ってもらえるような取り組みの構築や、情報発信の方法を工夫出来ればと思う。
○これまでの具体的な成果を盛り込むこと。釧路湿原の貴重さについての認識が薄れてきているように思う。生態系サービスについて具体的に湿原の重要性を再確認する必要がある。例えば、釧路湿原の存在が貨幣価値としてどの程度なのかを具体的に提示してはどうか。協議会では野生動植物の生息・生育の器として環境の再生に力を入れているが、エゾシカや外来種の増加による湿原への影響が考えられる。こうした個々

の野生動植物の視点からの討議が必要に思う。新釧路川のサケマス捕獲場におけるウライ設置は、大型の回遊性魚類にとって移動阻害になっているのではと危惧する。この問題は釧路川水系の生物多様性に影響を与えていないのかどうか検討すべき。

○釧路湿原の自然環境が豊かになることは、活動の主目的であり関係者の意識の中でも中心に置かれていると思います。しかし一方、地域経済の実態や地元住民が抱える将来展望にはまだまだ明るい部分は少ないと感じています（特に TPP 交渉の行方や人口動態を踏まえ）。課題の 1 つは、湿地や周辺部が持つ「豊かな生態系サービス」と地域住民の生活基盤とが、経済的な面においては乖離していることが挙げられます。自然再生事業で地域の生態系を再生した次の段階では、その価値を人々の感動に変え、観光資源の価値を高める等の努力が必要であると考えます。グリーンツーリズムを始め、スマートビレッジ構想や環境教育活動の積極的な導入等、日本各地で導入例が増えてきました。釧路においても斬新な情報発信と新しい可能性の検討を具体的に進めるべきであると考えます。

④自然再生の目標・イメージの明確化

○全体構想における「目指すべき釧路湿原像」について、1980 年代という表現はあるが、年々その記憶も実体験を持つ人も少なくなっていくことから、小目標としての具体的な湿原像を持つべきではないでしょうか？

○自然再生の目指すイメージとして、イトウの泳ぐ川とありますが…。釧路湿原の豊かな生態系を象徴するイトウの生息状況の把握や生息環境の復元といった具体的な保全施策を実行すべきだと思います。また、釧路川水系全域におけるイトウの詳細な生息状況調査を実施し、現在の資源状況を明らかにしたうえで、個体群の再導入も視野に入れた総合的で長期的なイトウ保全計画の策定を目指すべきであると考えます。

○再生普及のために、現状の自然（湿原等）がどの程度病んでいるのか、分かりやすく一般の人々が理解出来るよう、周知する必要がある。

○湿原の保全と生活の利便性（地域経済の発展）のバランス（折り合い）をどのように図っていくべきなのか難しい問題ではありますが、考えていかなければならないのかもしれません。

⑤協議会の機能強化

○小委員会が関係機関と専門家による各実施計画の議論の場として独立して運営されており、具体的な自然再生の計画や現場と地域・市民をつなぐ機能が協議会全体として不足している。特に、情報発信そのものが各実施機関任せとなっている現状では、自然再生事業全体への関心喚起や参加の拡大は望めず、「流域」意識は広がり得ないのではないか？（結果として、弟子屈町のコミットも得にくいのでは？）同様に、「地域産業との連携」も協議会全体としてどのように実現していくのか、見えていない。

○2013 年度から普及小委員会と他小委員会の連携が提唱されたが、全体構想の見直しにあたっては、普及小委員会を自然再生事業と地域・市民とのインターフェースとして位置づけ直し、情報発信や参加の拡大、地域との win-win 関係構築に関する協議会としての「戦略」を盛り込む必要があるのではないか。公共事業として実施される手前、予算事項の範囲でしか動けないが、例えば景観についての道路当局等との連携や地域振興についての市町村役場との協働等、政策間連携をもっと積極的に進めるべきではないか。

○　行政機関は担当者の異動が多く地域とのネットワークが深まりにくい。協議会発足当初にアイデアが出されていたように、協議会の事務局を部分的にでも民間に移行し、基金の活用等を組み合せて、役所間の縦割りを越えて実働する機能を育てて行くべきではないか？

○「全体構想」「行動計画」とも、情報の更新や時点修正は必要になりますが、内容を抜本的に修正する必要はない（現行版をベースに考えて良い）ものと考えます。質問１～２の課題にあげた「普及小委員会が全体の広報の役割を担う」ことと「学校教育との連携を強める」ことについては、もう少し強めに書き込んでも良いような気がします。

○再生普及小委員会の活動はこの 10 年で大幅に増加した点は評価できるが、その活動

を支えるスタッフが地元から育ってくれることを強く望む。誰に何をどこまでやってもらうのか、各活動の狙いを改めて見直し、今後の事業展開に反映させる必要がある。

⑥個別の提案

○釧路湿原国立公園内の細岡展望台から湿原を見た時、自然林の枝でさえぎられていることから、一部の川の蛇行が見られないため、全国から訪れる観光客の期待に応じられないことがある。そこで、釧路湿原国立公園及び鳥獣保護区と釧路湿原自然再生との兼ね合いをどう調和するかを釧路自然再生全体構想見直しワーキング協議会で議論をしていただきたいと思います。
○海外における湿原保護事例で優れた物があれば取り入れるなどして、国内で環境に関心の高い著名外国人にサポーターになってもらう。（外国人は環境保護について熱心な感じを受ける）日本人はムラ社会で、利害が及ぶ事は関わらないため、環境問題は二の次の感じがする。外国人（特にアメリカ人）等、日本人が弱い人々の力を活用していけば関心が高まり、注目されると周りが自然とついてくる方式で進めるのが賢明。※外国人が集まる、何か騒ぐ⇒注目する⇒普通人の関心が高まる⇒参加する⇒和になる⇒地域の活性化に繋がる⇒人口が増える⇒産業が増える等
○学校の先生を教育することが第一。

６　持続的な利用と環境教育の促進

【本施策の目標】

① 湿原や地域産業を題材とした環境教育のプログラムや機会、施設、人材の充実を図り、そのネットワーク化を進めます。
② 自然再生事業の情報発信を積極的に行ない、事業への市民参加の推進を図ります。
③ 湿原の利用に関するガイドラインやルールづくりを進めます。
④ 湿原やその周辺の環境を持続的に利用する産業発展のあり方を検討し、連携を図ります。
⑤ 植生等の保全・修復によって、自然景観の維持・改善を図ります。

【手法】

①環境教育の充実とネットワーク化

- 環境教育や市民参加の推進に関わる行動計画を策定する
- 環境教育の教材・人材のデータベースを作成して継続的に運営し、交流の促進と有益な情報の集積をはかる
- 湿原への関心を高めるために、人々と湿原との接点を増やすような場・機会をつくる
- 湿原についてより深く学ぶためのプログラムを開発し、実践していく

②自然再生事業の情報発信と市民参加の推進

- 情報のデータベース化をはかり、その公開を通して、地域住民や研究者が取り組みや調査研究に参加できるようにする
- 各種媒体を活用して、自然再生事業の必要性や内容を効果的に伝える
- 湿原の社会経済的価値を多くの人に伝え、湿原を守ることの利益を広める
- 地域住民や来訪者が再生事業に参加する機会を提供し、地域全体で来訪・滞在することの魅力を創出する
- 民間活動への資金協力や専門家の参加・アドバイスの提供を促進する
- 地域の学校教育に自然再生事業への参加や学習を組み込み、自然再生を教材として活用する

③湿原の利用に関するガイドライン・ルールづくり

- 湿原と関わりの深いレクリエーション利用による自然環境への影響を把握する
- 自然環境への影響について、緊急性の高いレクリエーションについて、関係者間の合意形成をはかりつつ、利用のガイドラインやルールづくりを行なう
- 湿原について深く学習したり、再生活動や地域産業に参加したりするなどの「エコツーリズム」型利用を推進する
- 利用の適正な誘導をはかるために、標識などの整備やガイドブックなどの作成を行なう

④地域産業の持続的発展のあり方の検討

- 環境への負荷が小さく、持続的に自然が利用できる技術を開発する
- 環境への負荷が小さい技術を導入するため、資金的な支援を促進する
- 環境の保全と地域の産業発展が経済的に両立するように、生産者と消費者の交流を深める

⑤すぐれた景観の保全

- 植生等の保全・修復によって、自然景観の維持・改善をはかる
- 地域住民における景観への関心や保全意識の高揚をはかる
- 湿原の周辺地において、野積み廃車など人為的に景観を悪化させている場所について、改善されるように関係行政機関が連携して対策をとる

【成果の評価基準】

【A. 流域全体での評価基準】

- 「行動計画」に基づいた取り組み数、参加団体数、登録される指導者数、指導書や解説書の発行数、環境教育プログラムの数など
- 自然再生の取り組みへの参加者数、再生紹介ウェブサイトへのアクセス数、募金金額など
- 一般市民や参加者の意識（再生事業への理解度や各種行事への参加意欲など）の向上
- レクリエーション利用等による負荷の減少
- 環境への負荷が小さい技術の開発件数や導入率の向上
- 各地域産業の収益率の安定度
- すぐれた展望地からの景観の維持、改善

【B. 手法の実施結果の評価基準】

- 参加者数と教育効果
- 情報の利用率
- レクリエーション利用等による負荷の減少